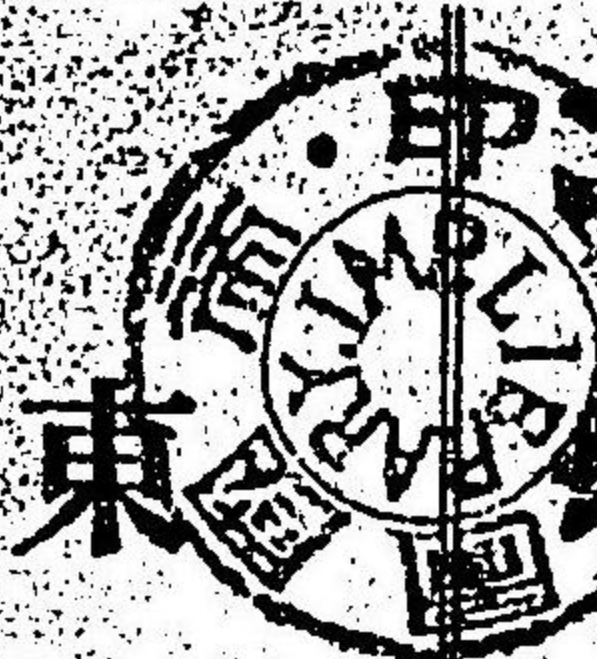


土岐善靜師
加藤咄堂君 編輯



新撰
諸侯
說教演說材料集

卷參第



東京

國母社發行

新撰 説教演説材料集凡例

一、本集は佛敎各宗僧侶の説教演説の資料を蒐輯し布教の一助たらしめむことを期するものなり

一、本集は費題因縁譬喩を初め東西古今の書籍より尙も布教の料とするに足るべき者は成る可く多くこれを掲載せんと欲す

一、本集は布教の材料を供するの旁ら讀者をして世間的智識を得せしめむか爲め學話を載せ尙ほ雜録に於て布教の心得辨解に於て見教演説の模範とするに足るべきものを掲げ

一、本集は毎月一回(二十日)發行して十回を以て完結す

一、本集の代價は左の如し
 ◎一冊定價金十二銭 ◎郵税一冊金二銭
 ◎十冊定價金十元 ◎郵税一冊金二銭

一、本集は代價前納にあらざれば發送せず

説教演説材料集第三卷目次

●説教演説引用俳句類選 ●金言 ●詩句 ●因縁談 ●法顯三藏 ●一休餅を喰ふ ●高僧の涙 ●法華の忠義 ●義山上人著に泣く ●放逸の僧 ●房に同心す ●老婆の熱情軍氣を沮喪せしむ ●孝子正助の事 ●孝女盜賊を感ぜしむ ●燈火と灯心 ●芥子なき國 ●めぐる火の輪 ●酒と砂糖 ●綿打と時計 ●鴨瀧の月 ●榎木の水 ●歌を懐しむ ●三人丹輪 ●談話 ●幽霊志願 ●遺耳と遠耳 ●險香なる時 ●鳥の幽霊 ●遺耳 ●三人丹輪 ●學者 ●飯の上の糞 ●門 ●貨幣の話(下) ●文明の字義 ●優劣 ●動物 ●植物 ●の區別 ●史談 ●説く ●道昭 ●火葬 ●を創む ●上杉謙信 ●機縁 ●説く ●道昭 ●火葬 ●を創む ●上杉謙信 ●雜録 ●説く ●道昭 ●火葬 ●を創む ●上杉謙信 ●宗敎 ●大意 ●説く ●道昭 ●火葬 ●を創む ●上杉謙信 ●國敎 ●院僧侶 ●説く ●道昭 ●火葬 ●を創む ●上杉謙信 ●講壇 ●説く ●道昭 ●火葬 ●を創む ●上杉謙信
--

新撰
各宗 說教演說材料集 第三卷

土岐善靜
加藤咄堂 編輯

贊
題

- 華嚴經 如來普觀法界一切衆生具有如來智惠德相愚痴迷惑不知不見
- 法華方便品 諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世
- 同經同品 如來但以一佛乘故爲衆生說法無有餘乘若二若三
- 同經同品 十方佛土中唯一乘法無二亦無三除佛方便說但以假名字
- 同樂王品 如來滅後々五百歲中若有女人聞此經典如說修行於此命終即往安樂世界阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住處生蓮花中寶座之上

○同經 我昔所願今者已滿足化一切衆生皆令入佛道

○大無量壽經 十方世尊智惠無碍常令此尊知我心行假令身止諸苦毒中我行精進忍終不悔

○同經 當來之世經道滅盡我以悲慈哀愍特留此經止住百歲其有衆生值此經者皆可得度

○涅槃經 若佛久住於世薄福之人善根不種貧窮下賤貪著五欲入於妄想妄見網中若見如來常住不滅便起憍恣而懷厭忌不能生難遭之想恭敬之心是故如來以方便說曰諸佛出世難可值遇而使斯衆生難遭之想以恭慕渴仰於佛陀便種善根

○大般若經 聞此般若波羅密多甚深理趣若他方所流行此經一切天人阿素落等皆應供養如佛制多有置此經在身或身諸天人等皆應敬禮

○華嚴經 聲聞緣覺菩薩佛陀諸法皆悉流入於華嚴大海

○六度經 契經如乳調伏如酪對法如生酥般若如熟酥眞言如醍醐

○決疑經 梵天王一時至靈山會上以金色優婆羅華所佛請佛爲群生說法世尊登坐拈花

示衆瞬青蓮目人天百万悉皆無罔措獨金色頭陀大迦葉破顏微笑世尊言吾有正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門不立文字教外別傳分付大迦葉

○天親菩薩願生偈 云何回向不捨一切苦惱衆生心常作願回向爲首成就大悲心

○無量壽如來會 若我成佛無量佛國中所有衆生聞說我名以已善根回向極樂若不生者不取菩提

○華嚴經に曰く 國に君王有て一切安を獲是の故に人主は一切衆生安樂の本なり

○父母恩重經に曰く 父母忽ち病に染る時は親自ら看視して下賤に委せず且つ床邊を離れされ

○毘奈耶律に曰く 若し其父母信なきものは信心を起さしめ、若し戒なきものは禁戒に住せしめ、若し慳なるものは惠施を行はしめ、若し智慧なきものは智慧を起さしむ、子能く是の如くなる之を報恩と曰ふ

○增一阿含經に曰く 父母を供養すれば大功徳を獲、大果報を成す是の故に常に孝

順に念して父母を供養せよ

○報恩經に曰く 父母は三界の最勝福田なり

○罪業報應經に曰く 孤老を欺かず下賤を輕せず彼を護る己の如くすべし

○雜寶藏經に曰く 佛法の中には唯善心を貴び珍寶を貴ばず

○瑞應經に曰く 一心を得る時は萬邪も滅すべし

○六度集經に曰く それ忍は萬福の源なり

○雜寶藏經に曰く 勝を得れば怨を増長し負くる時は憂苦を益す故に勝負を諍はざる其樂を最第一となす

○智度論に曰く 實語は是れ諸善の本なり

○同論に曰く 口の説く所身も亦自ら行せよ

○報恩經に曰く 惡言は身を斬るの利斧なり

○玉耶經に曰く 人誰か過なからん過て能く改むる善これより大なるはなし

○菩薩戒經に曰く 惡事は己に向へ好事は他人に與へ

○智度論に曰く 恩を知るものは大悲の本にして善業を開くの初門なり恩を知らざる者は畜生よりも甚し

○涅槃經に曰く 人の命の停まらざること山の水よりも過ぎたり、今日は存すと雖も、明んまで亦た保ち難し、いかにぞ心を縦にして惡法に住せしめむ

○占察經に曰く 一心に繫念して諸佛の平等法身を思惟するは一切善根の中に其の業最勝なり

○維摩經に曰く 諸仁者佛身を得て一切衆生の病を斷たんと欲するものは當に阿耨多羅三藐三菩提心を起すべし

○大莊嚴論に曰く 貪に於て正思を起せば貪に於て解脱を得る、故に貪、貪を出すと説く、瞋痴を出づることも亦爾なり

○顯宗論に曰く 我が此の禪門一乘の妙旨は無念を以て宗と爲し無住を以て本となし眞空を體となし妙有を用とす

○正法眼藏隨聞記(承陽大師)に曰く 浮雲おほふとも久しからず秋風破るとも亦た

開くべし臣わるくとも王の賢つよくむば轉せらるべからず、今ま佛道を存せんことも亦かくの如くなるべし、いかに悪心起るともかたく守り久く保たば浮雲も消ぬ秋風も止るべき道理なり

○同 誰人か初めより道心ある只だかくの如く發し難きを發し行じ難きを行ずれば自然に増進するなり人々皆な佛性あり徒らに卑下することなかれ

○尊號眞像銘文(見眞大師) 歸命盡十方無碍光如來トマフスハ歸命ハ南無ナリ歸命

トマフスハ如來ノ勅命ニシタガヒタマツルナリ盡十方無碍光如來トマフスハ即チ阿彌陀如來ナリコノ如來ハ光明ナリ盡十方トイフハ盡ハツクストイフ、コトノクミチタマヘルナリ無碍トイフハサルコトナシトナリ衆生ノ煩惱惡業ニサヘラレサルナリ光如來トマフスハ阿彌陀佛ナリコノ如來ハ即チ不可思議光佛トマフスコノ如來ハ智惠ノ相ナリ十方微塵刹土ニミチタマヘリトシルヘシ

○一念多念證文(見眞大師) 本願ノ文ニ乃至十念ト誓ヒタマヘリスラニ十念ト誓ヒ

タマヘルヲ知ルヘシ一念ニカキラストイフコトヲ况ヤ乃至十誓ヒタマヘリ稱名ノ徧數サタマラストイフコトヲ此誓願ハ即チ易往易行ノ道ヲアラハシ大慈大悲ノ極リナキラシメシタマフナリ

○親鸞聖人 娑婆永劫の苦をすて、淨土無爲を期すること本師釋迦の力なり長時は慈恩を報すへし

○同 弘誓のちからを蒙らすばいつれの時にか娑婆を出ん佛恩ふかく思ひつゝ常に彌陀を念すべし

○同 釋迦彌陀は慈悲の父母種々に善巧方便しわれらが無上の信心を發起せしめたまひけり

○顯佛未來記(日蓮上人) 我言は大慢に似たれども佛記を扶け如來の實語を顯はさんかためなり然りとていへども日本國中に日蓮を除き去て誰人を取り出して法華經の行者とせん汝日蓮を謗せん爲に佛記を虛妄にす豈大惡人に非すや日は東より出て西を照らす佛法も亦以て是の如し正像には西より東に向ひ未法には東より西に

往ゆく

和歌

◎説教演説引用和歌類選

寂羅坊集

○四十八願

草菴集

無三惡趣願

頓阿法師

あしかりし難波なにげのみつのうらの名も聞きこぬかたに漕こきそわかるゝ

雪玉集

不更惡趣願

逍遙院關白實隆

生うれくるこゝこそもとのふるさを迷まよひし道みちになにか歸かへらん

同

悉皆金色願

同

知らじかし秋あき來きるかたのいろにみな染そむるすがたは露つゆもしぐれも

同

無有好醜願

同

いつれをかわけてもそれとしら雲くもの花はなの外そとなきみよしのゝやま

新千載集

宿命通願

了然上人

いまそしる世よ々をこゝろに照てらしつゝ人ひとを鏡かがみといひしまことも

同

同

西園寺入道前關白大政大臣

ちきりおきし世々のむかしのことの葉はに残のこさすみかくあきのしら露つゆ

拾玉集

天眼通願

慈鎮和尚

なかめかはす四方しやうほうの淨土じやうとのひかりかなわか極樂ごくらくのもち月の空そら

摘題集

同

參議雅經

をしなへてたつねぬ山やまの花はなも見みつへたつる雲くものへたてなければ

雪玉集

同

逍遙院

たらちねの生うれしみちを先まつ見みつゝすくうためしをしるそうれしき

新拾遺集

天耳通願

參議雅經

遠さかる聲もをしますほどさすさのこすへき四方の空かわ

新續古今集 地心通願 同

みなひとのころくしられける雪ふみわけてとふもとわぬも

摘題集 神足通願 同

おもひたつほどこそなけれあつま路にまたしら川の關のあなたは

雪玉集 不起想念願 道遙院

くれ竹のよのうきふしのあらわれてわか身をかくとおもひはからめ

傳記 住正定聚願 法然聖人

身はこゝにまたありながら極樂の聖衆の數に入るそうれしき

夫木集 同 他何上人

いさなから彌陀のちかひに法の舟さして終りをまつそうれしき

雪玉集 同 道遙院

わたにさく花はうき世のひとさかりときはの松のこけの長閑けき

散木集 光明無量願 源俊頼朝臣

いつくにもあり明の月はさやけさにいと朝日のひかりそふらん

傳記 壽命無量願 法然聖人

百とせもいのるころのはかなさよ南無阿彌陀佛の無量壽なるに

碧玉集 同 諫議大夫基綱

かさりなきよはひをたもつ名をとめて誓ひし法もあたし世のため

雪玉集 聲聞無數願 道遙院

ともに聞きひとつとささる法のみち濱のまさこのかさりやはある

玉吟集 人天長壽願 從二位家隆

さまくにかはるすかたをしたかへてたのひひかりに消るよもなし

雪玉集 離諸不善願 道遙院

わけゆかはうつらん袖のいろもうしよそにを過ぎよ露の萩原

同 諸佛稱揚願 同

いく千さどをなしてゝるにかけで待つ名も高かれや山波とゝます

續後撰集 念佛往生願 湛空上人

六のみちいくめぐりしてあひぬらん十こねひと聲すてぬちかひに

雪玉集 同 道遙院

汲みしれはその水上のにこりなき流れは四方の海もあさしや

續古今集 來迎引接願 源信僧都

極樂をねかふおもひのけふりこそむかひの雲とやかてなるらめ

玉葉集 同 法然聖人

柴の戸にわけくれかゝるしら雲もいつむらさきの雲に見るらん

夫木集 同 源信僧都

すみよしと彌陀の御國を聞きしよりいとむかへをまつと知らすや

傳記 同 源空上人

千とせふる小松のもとをしるへにて無量壽佛のむかへをそまつ

雪玉集 植諸徳本願 道遙院

かけておもふこゝろにちかしかの國はへたてあるへささかひならねは

拾遺集 具足諸相願 光明皇后

みそちあまり二ツのすかたそなへたるむかしのひとのふめるあとそこれ

(此御歌は山階寺にある佛足石に書きつけたまひけるとかや)

新後撰集 同 中原師光朝臣

三十あまりふたつの姿たへなればいつれもおなし花のおもかけ

雪玉集 同 道遙院

はとけにもかはらぬすかた得るの身はあやしかりける契りならずや

(四十八願未完)

俳諧

◎說教演說引用俳句類選

寂羅坊集

果報	數珠を先ツかけて化したり鳩の聲	自天
油斷	旅人のまた日はありと雉子の聲	涼帝
聖徳太子	八ッの耳此時はしや百千鳥	呂々
貪欲	鳥の巢や藤もくはへて引て見る	左枝
愛着	子に世話のなを口きいてひら雀	白扇
無宿善	花踏まぬ足は短かし歸る雁	一紅
懺悔	落ちてみな女こゝろや春の鹿	兔洲
和合	蝶々や花の上へ下々争はず	千山
驕慢	貫之にいはれて奢る蛙かな	柳居

勤勉	畑打の拜んでもどる夕日かな	涼帝
愚痴	糕になる根は見どいけぬ藤かな	青千
隨縁真如	北野から氣のつく道や土筆	安里
他生縁	菜の花やいつやどり木の麥はたげ	祇丞
宿縁	梅圃夫の味噌さへあれは野蒜かな	仙水
流轉輪回	萍やことしもちがふ生へどころ	少波
光陰	つかの間とこれもよむし蘆の角	眠棠
教化	苗で先ッいひふくめけり菊つくり	帶河
無常	散り椿あまもりさしに接いでみる	野坡
慈誠	聞かばまた優曇花なりと接穂哉	冠子
隨喜	出代りや夏よそうな井戸もある	艸志
了因佛性	一トとせの寐顔は見せぬ雛かな	希因
我慢	氣のつよひ人誘引ふたり鶏合せ	長嘯

遷流	青柳の泥にしだる、沙干かな	芭蕉
結縁	介殼の筆架もたへて、蜆どり	秀律
世尊	國がらの暑さや早き御身拭ひ	鳥道
無常	長き日や暮にはかはる飛鳥川	涼洲

詩句

○在唐奉本國 皇太子
 釋道慈
 三寶持聖德、百靈扶佛壽、壽共日月長、德與天地久、

○山中
 釋道融
 山中今何在、倦禽日暮還、草廬風濕裏、桂月水石間、
 殘果宜遇老、衲衣且免寒、茲地無伴侶、携杖上峯巒、

○賦雪
 釋蓮禪

雪白雲黃年景闌、捲簾相望慰幽閑、曉留明月千程地、
 冬有衆花四遠山、孫氏寒窓如燭映、孟嘗昔浦似珠還、
 賞吟綠底更爲恨、彌點鬢華一半斑、

○初冬偶詠
 同

荒涼一屋古三逕、行樂微々日漸曛、菊色金殘當步武、
 葉聲錦昵散奇文、曉來爐氣寒無火、愁後衲衣薄自雲、
 柴門不開人不訪、從斯心事與誰云、

○爐邊清談
 同

閑談少飲兩三朋、冬夜々長寐不能、深火爐前居煖酒、
 小書架下立挑燈、老來都忘烟花月、眠底猶思佛法僧、
 枕冷床寒衣也呀、暗知山雪與池冰、

○偶作
 菅原道實

病追衰老到、愁趁謫居來、此賊逃無處、觀音念一廻、

○燈滅二絕

同

脂膏先盡不因風，殊恨光無一夜通。難得灰心兼晦迹，
寒窓起就月明中。秋天未雪地無螢，燈滅拋書淚暗零。遷客悲愁陰夜倍，
冥々理欲訴冥々。

○水心寺

大江匡房

餘抗蕭寺在湖頭，傳道水心景趣幽。火宅出離門外路，
月輪落照鏡中遊。雲波烟浪三千里，自想心馳五十秋。
天外茫茫齡已暮，此生何日得相求。

○君言

釋月性

君言常思我，我亦常思君。唯恐君思我，不如我思君。

○羅漢贊

蘇東坡

正座斂眉，盤腕立拂。問此大士，爲言爲默。默如雷電，
言如牆壁。非言非默，百祖是式。

○雪頌

承陽大師

將暮孟冬降密雪，四山無柏亦無松。休將委積論多少，
欲似嵩々少室峰。

○靜勝軒銘（武州江戶城太田道灌號靜勝軒築一書院其南掛此詩板）

萬里居士

靜爲天德，維天何言。勝爲地勢，維地有源。東吳西嶺，
萬象一軒。仁者必勇，信况及豚。鐵鑄墨壁，能守彌敦。
松茂柏悅，子女孫々。

○總供養香語

洪川和尚

乾坤宇宙寶樓閣，萬衆森羅甘露門。中澗曹源一滴水，
百由旬內沒饑魂。

- 黃山谷 ▲ 城上已吹新歲角、窓前猶點舊年燈、
- 碧巖五十一則頌 ▲ 南北東西歸去來、夜深同看千岩雪、
- 羅湖野 ▲ 本是瀟湘一釣客、自西自東自南北
- 淮南子 ▲ 一葉落知天下秋
- 李白 ▲ 牀前明月光、疑是地上霜、舉頭望山月、低頭思故鄉、
- 鐸煥 ▲ 燕子不來花落盡、一簾疎雨又清明、
- 曾幾 ▲ 漏箭更籌日夜催、萬牛不挽白駒回、
- 白居易 ▲ 病眼少眠非守歲、老心多感又臨春、火鎖燈盡天明後、便是平頭六十人、
- 山隱 ▲ 莫言深遠無人到、滿目青山是故人、
- 東坡 ▲ 生前富貴草頭露、身後風流陌上花、

金言

- 孫子曰く 善く動く者は九天の上に動き、善く潜む者は九地の下に潜む、
- 孔子曰く 其の未だ之を得ざるや患て之れを得、既に之を得るや患て之を失す、苟くも之を患るに至らざる所なし、
- 孟子曰く 仁なれば則ち榮は不仁なれば則ち辱めらる而して不仁に居れば是れ猶ほ濕るゝを惡て下きに居るか如し、
- 程子曰く 懈るの意一たび生せば是れ自ら棄て自ら暴するなり、
- 荀子曰く 高山に登らざれば天の高さを知らざるなり深谷に臨まざれば地の厚さを知らざるなり、
- 伊尹曰く 天の作せる孽は猶ほ避くべし自ら作せる孽は避くべからず、
- 諸葛武侯曰く 靜にあらざれば學を成すことなし陷慢なれば精を研くこと能はず

險躁なれば性を理むること能はず、

○蘇老泉曰く 一忍以て百勇を支ふべく一静以て百動を制すべし、

○スピノザ曰く 笑ふなかれ悲む勿れ嫌ふ勿れ唯だ認識せよ、

○ブルノー曰く 苦痛の時に際しても心思清澄なれ心思清澄なる時に際しても苦痛を忘るゝ勿れ、

○ペーコン曰く 哲學を生啗するものは動もすれば無神説に陥る然れども多くこれを味ふものは宗教に歸るものぞかし、

○カント曰く 吾人か今后漸く進歩しゆくにつれつるには人生の理想を心に立て、これを信仰するに至るべし、

○シヨツペンハワー曰く 宗教は(基督教を指す)哲學に屬する王位の篡奪者にして一千八百年来科學に積鬱をはめたり、

○マクスミユラー曰く 佛教の性質は水の如く基督教の性質は火の如し、

○フォエルバッツフ曰く 宗教は人心固有の病症なり此の病症は即ち宗教の根原なり、

○ユゴー曰く 最も繁昌せる人の一生にありても實際常によるこびよりかなしみの多きを見れば墨天は吾人に尤も恰好せるものにて晴天は徒らに吾人を嘲弄するに過ぎざるべし、

○ミルトン曰く 早朝を以て一日の天氣を兆するか如く小兒を以て大人を卜すべきなり、

○セヨウエラース曰く 社會幸安の源は多端なりと雖、要するに總て唯だ同一の泉源より生ず即ち人民の教育これなり、

○アーヴキング曰く 墳墓は一切の過失を埋め一切の失敗を蔽ひ一切の怨慍を滅却す、墳墓の長閑なる胸底より浮び出るものは切なる哀傷の情と優しき追懷の情とのみなり、誰かは仇敵の墳墓をだに侮蔑し得るぞ誰れかは今ま我が前に横はる此の一掬の塵埃と戦争せしことを悔恨せざる、

○ポーブ曰く 人間の常に知らんと欲するは乃ち人間なり、

○スペンサー曰く 兒童は父母の行爲を照らす鏡と知るべし、

- ノルゼント曰く 優しき言は他人を善に感化するの益あり、
- ペーシ曰く 人の精神は不死不朽の寶玉にして能くこれを琢磨すれば光輝を發し純金も之に比して實に汚穢の滓物と同じくなるなり、
- 同曰く 人瞋恚の念を發すれば其の威嚴を損すること甚しきものなり、
- ツエーケル曰く 眞實を貴ぶ人はまた眞實の爲めに貴ばる、
- ペスタロジ曰く 温和なる言語と慈悲の情とを以て之に接せむには其の一舉一動は皆な能く他を感せしむる力あるものなり、
- ミル曰く 世人の多くは大理大道を知らずして醉生夢死するものなり、
- レツシング曰く 眞實を勉め行ふは眞實の事に勝る、
- ヤンパウル曰く 愉快なる心は猶ほ天の如き乎萬物其の下に在りて繁殖すされど毒物はこれに與らず、
- シルレル曰く 己れを知らんと欲せば他人を見よ、他人を知らんと欲せば自己の心に問へ、

○トーマスブラウン曰く 戦争して敵に捷つは小き勝利のみ、己れか私欲情欲を制して之に捷つを大勝利とは云ふなれ、

因縁談

◎法顯三藏

法顯三藏は平陽の武陽といふ所の人にて晋の隆安三年に同學の出家惠景惠整惠崩惠應等の廿一人志を立て長安の都を出發し天竺に入んとて流沙河に到るに空に飛ぶ鳥もなく地に走る獸もなく四顧渺茫として草木を見ず唯日月の出入を以て東西を知り人骨の曝されてあるを道しるべに西へくと進みゆくに熱風吹て膚を犯し惡霧覆て道を妨ぐ陰鬼火夜は燃て冥鬼晝も哭す辛じて葱嶺と云ふ山を過るに冬夏雪降て肌は刃を以て割く如く惡龍毒蛇沙を雨らし嶮路は壁立千仞屏風を立たる如く棧道七百

余處「かけはしや命をつなぐ驚かつら」危きこと云ふべからず漢の張鷟甘父も此處迄は探り求めざりし無人の境にして同行の出家衆難に耐へかね毒に觸れ巖より墜ちて死するあり病に罹りて没するあり廿一人の中十九人までは命終り纔に法顯と惠景とたゝ二人になりぬ心細く哀れに伴ひ行くゝ互に力を添へ音に聞ゆる雪山に登りかゝれば寒風切りに雪を巻き惠景法師も嵐に勝へかね脚すくみ口嚙み己に命終らんとす法顯に語りて曰く契りを同林に結び思ひを水乳に和し佛生國に到り法を求めんとせしに同行 盡く没し君と二人のみなりしに我も亦縁淺く報拙くして先途に達せず今は空しくなりゆくぞやさりなからこれ宿因のなすところ足下は一寸も早く進みて我と俱に寒苦に侵さるゝなかれと云ひ終りて息絶ぬ法顯涙にむせび同行皆死して君と我とのみ昨日や今日と影を並へ袖を列ね早く印度の境に入り共に世尊の靈跡を拜せんとせしに君に別れて只一人涙のみを伴はんとは實に思ひもかけさりきと泣くゝ惠景の骸を埋め夫れよりして、我影のみを伴ひつゝ山又山と越ぬ分くれは昨日の峰は今日の道となり谷又谷を渡り過くれは朝の雲は夕の宿となる野七里山七

里三十餘國を経て漸くに天竺の地に入る王舍城を去ること三十餘里の道を隔て一寺を尋ね貧道は支那の出家十萬餘里の艱難を凌ぎ中天竺へと志すもの身命を捨て法を求むる僧なり先づ耆闍崛山に詣んとす願くは憐みを垂れて道の案内を教へたまへと懇請するに寺僧答へてその志は殊勝なれども道峻くして日暮んとす山登へて霧深く川早くして道高し其上に師子虎狼多くして容易に行くへき道ならず今夜はこゝに舍りて明朝を待ちたまへ法顯曰く貴論誠に好しされども我が同行廿一人志を合せ此人界に生を受ても佛生國に程遠く大法に逢ひ奉れども金口の説を聞かすせめて靈跡を拜せんと本土を出て途中に廿人を失ひ貧道たゝ一人幸に十万余里を過ぎ來り今終りに天竺の境に入る然れども人命不定の世の習ひ若し今夜に命終らば多年の望みを失はんとす今霄靈山に到て毒獸に害せらるゝも決して後悔は致すまじと達て請ひ求めたるに寺僧その志を憐れみ二人の僧と十人の僕とを以て護送せられしに夜中に發して翌日の夕暮に靈鷲山の麓に達す僧も僕もこれよりしては毒蛇惡獸の恐れありとて棄て歸り去る法顯一人嶮嶮を攀ち道十數里を分ち登り大樹の下の寶石に端坐合掌

焼香誦經して世尊在世の昔をば今日前に見る如く梢の嵐谷の音も御説法の聲かどわ
 やしまれ草木の色までも釋迦の淨土となつかしく通夜首楞嚴經を讀誦したまう夜既
 に三更に及ぶころ三匹の黒獅子來りて唇を舐り尾を振る法顯獅子の頂を摩て汝も
 し我を瞰はんとならは暫く我誦經の終を待てと人に向ひて言ふ如くすれば獅子は首
 を垂れて去る曉近くなるころに九十斗と見ゆる老僧の年少の沙彌を隨へて過ぐるを
 見る法顯沙彌の袖をひかへ此老僧何人なりと尋ればこれは上坐の摩訶迦葉尊者ぞと
 教ゆ、さても難有と拜する間に岩頭に隠れたまふ慕從追戀して衣の袖をしぼりそ
 れより所々の靈地を巡拜し經論を得て梵土に苦學する三年後に晋に歸りて翻譯の三
 藏となり摩訶僧祇律方等泥洹經雜阿毘曇心論等を譯す(僧傳)實に法を求るの難さ
 かくの如し我等末世に生れて飽くまで聞くを得る何の宿善ぞ最も喜ぶべし

◎一休蝟を喰ふ

一休和尚は章魚を喰ふて嘔吐たまへは門徒破戒の僧なりと罵る一休笑ふて我は喰は

ねども口中より出たれば詮方なし唐土の善導大師は阿彌陀を喰ひたることなはれど
 も念佛すれば口より阿彌陀を吐きたりとこれ當坐の戲言に似たれども赴機能引の大
 悲説法なり

◎高田の派祖顯智師命を重んず

親鸞聖人の弟子顯智ある時菌を食して食傷しければ聖人これを誠しめたまひ大法を
 荷擔するものは其任重ければ生命を大事にすべしむざとしたるものは喰ふへからず
 どのたまふに顯智一生の間菌を食はず又下野より上京の時は桑名の船に大風に逢ひ
 難儀せしを聖人強く誠しめたまふに一生の間舟を忌みたりと云ふかゝる小事すら師
 命を輕んぜず況や一大事の法に於てをや

◎能因法師の歌

歌聖能因あるとき「都をば霞と共にたちしかど秋風そよぐ白川の關」といふ歌を得

たりかほどの秀逸を都に居ながら讀みたりと云はんは本意なきことなりとて二月のころ知音の許へ暇乞に行きて歌枕修行の爲めに奥州へ下向すと披露しそれより庵室に閉ぢ籠り人に逢はず夏の暑熱に窓より首をい出して日光に曝し色黒く旅疲れのやうに仕立て秋の末になりて陸奥より歸りたるよしにて此歌を白川の關にて讀みたりと披露しける(隱逸傳)かほどに歌道に執心なればこそ秀逸と千載の下にも賞めらるれ世間好事の人は己か後園の菓實をも遠來なりとて茶客に誇ることもあり他力の念佛は西方極樂の遠來なるを自力の善根とするは黄金を泥中に投ずるか如し

◎乳母の忠義

勢州龜山領鈴鹿郡川崎村に江戸屋某といふ相應の百姓あり主人は養子にて家附の妻その母と三人外に召つかいあり妻一人の子を設け橋彌といふ此子三才の時又女子を出生しけるに橋彌に乳母を抱へ養はせけりさて彼女子は近村へ遣はせしに又續きて女子を生し此子は七日ほどにて死したり打つゝさ出産もあり且つ主人の心得方も能

からず追々に借金も出來必至と困窮になり諸道具田畠まで人手にわたるやうになりそれを苦にして女房は死し主人と養母は遂に他國へ影を隠したり残りしはたゞ乳母と橋彌のみ此乳母の名をとせと呼び奉公に來りて三年はかりは給金を得たれども不如意の後はそのれもなく里よりは暇を取りて歸れといへども橋彌を不便と思ひ自分の衣服を賣り拂ひ親里へ贈り自身は生涯養育の子を守り江戸屋の家を引起さんの志を立て親里より送り一札(今の送籍)を貰ひこれより川崎村の人別に入るかばかりの大願なれば人の力の及ばぬ所神佛の應護を祈らんと海山かけて百余里なる讚州象頭山金毘羅權現へはだし参りをなし神前にて主家を立ん志を告げ三の誓を立たり第一に鐵漿を含ます(今は白齒の老嫗あれども當時は必染むるの時代)第二に髮に油をつけず第三に男に逢はずと固く誓ひて國に歸りたり此とせは同國桑名領員辨郡五反田村の百性長七といふもの、娘なり年は三十美目形人に勝れことに盛り過ぎたる齡でもなくたゞ忠義の爲めに身を惜まず主家を起さんの志神佛何とて見捨たまはん村方へも厄介をかけたる江戸屋のこと其家名を起さんは村方へ對し出來ぬことなれども

幸に村の無盡頼母子に掛け込みありし圖か當り金五兩と銀十匁冥加の爲め村へ出
 し家名相續の義を頼みしに村役人を始め村中もその志を感し勿論家屋敷は人手に渡
 り終りたれども地面の片隅に物置小家のありたるを村の情に借り受けこれに住居し
 他人の田地四反を預り兒を守りながら田をすき草を取り肥を荷ひ虫を追ひ女の瘦腕
 の艱難辛苦夜は夜なべに草鞋を作り庭を織り朝は未明より耕作なしその隙には縫針
 洗濯たゞ橋彌の手足の伸るを楽しむに年月を送り迎ふる内に早くも橋彌十才と成る
 乳母の慈愛に母と呼へどもとせは主人と敬ひ育てる扱とせの實子文五郎と云ふも十
 一才になりしを川崎村へ呼び寄せ橋彌と共に一年餘り手習をさせその後人を頼みて
 文五郎を松坂へ遣りそれより江戸へ奉公につかはすこれ實子を手許へ置けは自ら主
 人の子を疎略にするの心起らんとて百餘里の外へ産みの子を追ひやり主の子を育つ
 るは實に難有き志なり十八年の長月日朝夕の食物も自身は黍稗に糠を交せ橋彌には
 常体の食を與へ兒は母と慕へども身は主従の心得を失はず此誠心といきて橋彌十八
 才の時に元の屋敷地を買ひ戻し四間斗に七間の家を新らたに建てその上馬をも飼ひ

小者一人を召し仕ひ田地一町四反を作りそれのみならず前に家出なしたる老母を探
 し出し養ふことに成れり此誠忠遂に領主の耳に入り御褒詞をいたし銀十枚米五俵
 を賜りたり或る時に馬を買ひたるに甚な良馬なりければ橋彌に銀二兩を持たせ博勞
 の方へ禮にやりたり博勞大に驚き凡そ世間の人は良馬を直安く買へは買徳と心得數
 十年來博勞はすれども跡より禮を貰ふたるは始めなりと謝せしどかや又橋彌耕作の
 隙には馬を牽て若松浦といふ三里餘りの處へ米を付て通ふに必ずその日の飼料一日
 分の外に大なる餅三つを持せ馬の脊をかへる時に一つ荷を下したる時に一つ歸る途
 中に一つ與へたまへと心付けたりこれのみならず始め小屋住居の難儀の折より自身
 の食料の黍稗を小鳥犬などに施したりといふ「山鳥のはろく」と鳴く聲きけば父か
 どぞ思ふ母かどぞおもふ「乳母の慈悲は禽獸に及ばし忠愛の志は行基菩薩にも勝る
 と云ふべし扱實子文五郎これ又此母にして此子あり實直に奉公なし江戸表より初登
 とて傍輩同道にて松坂におち付き夫より母を尋ねて川崎村へ來るに暫く逗留して松
 坂へ歸るに伊勢參宮をすることなれば橋彌を共に詣させんとその用意をなし文五郎

は御主人を頼み奉公に出したる上は善に付け悪に付けとせの預からぬところ橋彌殿は大切の身初旅とてうか／＼せず飯盛などを相手とすることは禁じますもし悪き病をも受け身に疵の附くことあらは親御の家を繼ぐとも恥を雪ぐといふものでなし返す／＼も身を清淨にして參詣したまへ此乳母は同道はせねども御身の道中でしたまふことは直に知りておりまするぞ「たらしねの親の守りとそへてやる心ばかりは關もどいめず」此心にて育て上げたる橋彌は柔和にして詞少なく在の癖なれば若き人は男も女も夜は遊び回れども橋彌に限りては一夜も他に遊びしことなく後には川崎村の豪農となりしと云ふ

◎義山上人箸に泣く

元祿年中に洛東粟田山口に義山上人として遁世の智識あり智道兼備の殊勝なる僧なりし或るときに學應法師と云ふ僧かの艸菴に參りて法門を聴受し夜話せるに已に初夜に垂々としければ立歸らんとしけるに上人曰く幸に和州郡山の舊里より今日しも小

豆を贈りしあり粥として饗ふへしと留めたまへは又暫く法話に時を移しけるに上人つゝ立て棚の邊に新らしき箸のありけるを持ちてや、暫く獨言にのたまひけるは無始の慣習なる賊人哉／＼と目を塞き涙ぐみけるを學應法師不審に思ひ何の故と尋ねしに箸打ち捨てさめ／＼と泣き今宵しも此をこそ用ゐんと取り出しけるが又思へらく此箸は有馬の名産の桑箸なりとて昨日人の與へけるか我受用の箸にすべしあたら箸を他人に用ゐてはいかにも惜し／＼と思ひける一念の萌こそ極めて淺間敷妄念なれ未だ彼我の念の止まざるは何ことぞ且出る息は入るを待さる身を以て我平生の受用にすべしとはこれ何事ぞ今の一念の所に實我實法の常見は幾重々萌し起る煩惱の大賊我が心室に亂れ入りて功德の財を奪ひたることの悔しさよとて發露の涙を流されたり老僧の頻りに打歎嗽きたる聲にてわな／＼きくどかれたる氣色道心色に顯はれ至誠人を感せしめぬ學應も諸共に讚嘆の涙を落しけるがこれより學應も出世の學問を捨て捨世學道の眞の僧となれり（新選發心傳）

◎放逸の僧姪房に回心す

近世名高き叡山の某僧は若き時は極めて放逸濫行の人にて祇園宮川などの酒肆姪房に遊び戯れしが或る時日比の悪友と共に祇園の揚屋に到り深更に二階の窓を開けは折しも三五夜中の名月澄みわたり叡山の手取る如く見へけるを熟と眺めてありけるが夫れ吾山の鼻祖傳教大師鎮護國家の靈場を開きたまひしは末代の僧侶をして解を開き行を立て一念三千の理を證悟せんために身命を抛ち辛苦を忍びたまひしにこそあれ我如き不法の悪僧を棲ましめんとてよも建立はしたまはじと頻りに自身の咎を省み深く慚愧の心を起し忽ち夢の覺め夜の明けたる如く佛祖の冥慮もいと怖しく暫くもその席にあるにもあられす直ちに叡山に歸り佛祖の前に臂香を焼き堅く誓を建てつゝ再び姪房酒肆の道筋をも踏まず清淨持戒の僧となり名高き智識となられけるとなんこれを實に一念回光して當下に見徹し境に觸れて了達せる人なるへし大乘莊嚴論に於貪起正思於貪得解脱故說貪出貪とはこれなり姪欲即是道と説きたまへる

も迷悟一如の妙理ならん

◎老婆の熱情軍氣を沮喪せしむ

米國南北戦争の時、將軍リーは勝に乗じて進行して一小村を踏み破りて過ぎんとせり時に村端に一敵旗あり全軍爲めに蹕を止む、リー乃ち敵旗を砲撃せしむ然れども寂として聲なし之を連撃するに及びて一老婆あり優然として樓窓より半身を出し硝煙の中に立ち靜かに呼びて曰く、嗚呼同胞何ぞ相争ふや、戦争の是非は明らかなるにあらずや、予年既に七十、餘命いくばくもなし願くは汝等の砲に葬られて此の修羅の巻を脱せん、希くは諸君劍を收めて故山に歸れ、歸る能はずんば予を射よと、リー黙して云はず、たゞ令を下して全軍を進ましめたれど全軍爲めに大に沮み、まことや正義のあるところ甲兵も亦た打つ能はざるものぞかし

◎孝子正助の事

享保の頃、筑前國宗像郡武丸村と云ふ所に正助と云ふ男ありけり、父を正三郎と

云ひて至極の貧乏人なりければ、自らは人の家に備はれて僅かの給金を得其を少しも無益に費さず餘力を以て父を養ひなほあまりあればこれを貯へて終には少しばかりの宅地を買ひ求めこれに父を住はせ自分は骨身を惜まず働さ休暇あるときは山に入りて薪を探り山野の荒れはてゝ人の使はぬ地を拓きて親を養ふたよりとなしたるほどに正助二十三の頃には主人に暇を貰いて家に歸り二反ばかりの田地を買受けこれにて貧しきながらもいと氣樂に世を送り居たり、父正三郎はもとより酒を好みければ日々正助酒屋に赴きてこれを購ふに酒屋の主人もその孝心に感じてをなたに求めらるゝ酒はわづかなれば此の後には價に及ばずと云ふに正助は其の厚情を謝して歸りしが再び其の家に至らず別の酒屋より購ひたりとぞ、こは初めの酒屋の意に任せては孝行の本意に叶はず、さればとてむげに斷はるも禮にはあらねばかくなしたるなり父正三郎は六十歳にて中風症に罹り起居も自由ならねば自ら負ふて何くへも連れゆきしがある時の事なりとか父が妹の許へゆきたしと云ふに正助いつもの如く負ふてつれゆきしが正助妹の家にて頻りに泣くに妹はあやしみて何故ぞと問へば

父様を負ふて送り迎ふること幾回なるを知らねど今日ばかり軽くなりたまひしはなしこは畢竟老衰し玉ひしなりと思へば何となく悲しくなりしなりと云へりとかや、以て親を思ふ心の深さをも知らるべし、又或る時正助の外出せんとするに雨后天りければ、父、道も濡かりなん下駄にてゆくべしと云ひ、母は外より歸りて最早や道も乾きたれば草履にてよしといふに正助は否ます隻脚に下駄隻脚に草履をはきて出でゆきしといふ、これらにても如何に兩親に孝養を盡せしかを知るべし、さればにや享保十七年壬子の年大に蝗の災害ありて諸國一般大飢饉にて九州は殊に甚しかりしに正助か田のみは少しの害をも蒙らざりきとぞこれ全く佛神の加護にやあらむ、さるに正助は自身は草の根木の芽を食ひて飢を凌ぎ父母の食料に供する外はすべて近村の人々に其の種子を配分したりといふ、感すべき人にこそ、今も尙ほ其の木像同郡藤原村の淨蓮寺にのこりて香華たぬすと聞く

◎孝女盜賊を感せしむ

丹波の國と丹後の國なる界に毘沙門山と號する所あり、その麓の村にいと貧しき農夫あり二人の娘ありけるが、一人は先妻の子にして十七歳妹は十才なりけるに、父は姉か十才の時身まかりて、二人の娘母につかふること孝行いよく深切にして母のやしなひ怠らずと雖も、幼き輩のはたらき三人の過ぎはひ届き及ぶべきかたもなく、一人は果物を商ひ日々に市町に出で、姉は山野に行きて薪をこりあるは人に雇はれてわづかの代にかへて母をはぐくみ、時として食に乏しき折は果物をも賣らで母に與へ姉は人によりて糧ともなるべきものを乞ひ二人ともにとかくして日を送りけるがある時二人つれ立ち人なき所にて窃かに物語りける様、妾、母を養はんとすれども御身と共に働きたればとて、なか／＼に衣食の二つ母に届く所なし、思ふに都には人あきびとのありと聞けり、そを尋ねて此身をうり其の身の代をもて母を養ひたく思へり、御身の歳まだいとけなきと雖も、母を大切に養ひまいらすべしと涙せきあへず云い聞かせければ、妹は姉に分れんことの哀しくて共に泣きつゝいらへだにせざれば、此の事母には申すまじとてなだめすかして家に歸りぬ、其の日

より暮れぬれば夜毎にかの妹の見えざれば姉は妹が行き方をひそかに母に尋ねけるに、山の毘沙門堂へ心願ありとて、詣づるなりと云へり、殊勝さいとしく思ひ居たるに、折りふし雨のいたく降りけるが姉の妹に云ふやう、今宵は雨降りて道も暗く小坂のけはしきを行きて怪我ありてはかへりて母の歎もあらん、あけて晴れなば詣づべしとやめ玉へと止むれども、けふ七日の満願なれば、母の事姉の事天王に願ひまいらせていかでかは偽り申すべき、只管に許し給へ、ゆめ此の事母に告げ給ふなとて、大雨も厭はで夜半の程に一里余りも隔たりたる時の堂へ出で行きけるが、辛ふじてそこにたどり行きて見るに堂の内赫々として火影のかやきければ、いと不審しく思ひて内を覗ひ見るに、二人の賊共雨に濡れたる衣類を焚火に乾したり、いかで賊とは知るべき、旅人の雨宿りせりと思ひてそと内に入れば、賊は物音に打驚きつゝ目をとめて外の方を見やれば十才計りの女子獨り篋笠かつぎて來り雨夜の暗きに唯獨りこゝに來るは連におくれしにやと云へば連はなしと答ふ、又いづれへ行くとて此處へは來しと云ふに此の御堂の本尊へ願ふことの侍りてしかも

今宵は満願なればまうでつるなりとて進入りて暫し拜禮してあるをかの賊は打ち見つゝ麓の村よりも遙けき道を如何なる祈願のありてまうづるぞと問ふに、女子は暫しものも得云はでつい居たりしが、強て尋ね問ふに泣くく答ふ、妾は一人の母を姉と二人して養ひまいらすれども、歳たけ侍らねは心届かず、父は過ぎし年身まかり給ひてその頃田畠を賣りて今は無く其の日を過ごさんよすがのなさに、姉の京へ身を賣りて母を養はんといへど、妾獨り母を養ふことの難ければ、母をも養ひ姉をも身を賣らすまじと思ひおまれど願まん人しあらざれば、神佛より外に便りもなく此の御堂の本尊に七日参りの願をかけ、此の事叶ひ侍らずば、命をめされ候へと祈り申すなりとて、さめぐと泣きければ、賊は互ひに顔見合せ二人涙を拂ひつゝ貰ひ泣きして扱は孝心の娘かな、よくこそ母を大切に思ひ姉をも大事にしつるぞとて、かの二人は何事をが囁きて憐を催ふし、盗み取りたる金銀に衣服を副へ、風呂敷に包み小女に與へていひけるは、今より母になほ孝養を盡すべし、我等旅のあき人なり、不便に思ふまゝ褒美にこれを取らするなりとて、簞笠させてかへしける

は、至孝の心に感じてや毘沙門天の利益にて得さしめ給ふにもことならずと、この頃人のかたり傳へし

(雲萍雜誌)

譬 喻

◎燈火と燈心

燈心に火をともして夜を照すに風吹けば燈火は消ゆれども燈心は失せず又重ねて火を點せば光りあらはる此身の死するは火の消ゆるなり善惡の業を造くるは燈心をそへ油をつぐが如し火は消ゆれども燈心のさへさるは此身死して亡ぶれども魂神は亡びず重ねて火を點すれば元の光りあらはるゝは今生の善惡の業力に従ひて後生の身を受くれは今の我身の如く見聞覺智のはたらき具るなり人死して此身滅すとも心識も消へ亡せたりとは疑ふへからず

◎芥子のあき國

罌粟のなき所へ往きてけし一粒を出し此中より四五尺の莖が延びて錦の如く奇麗なる花が何輪となく咲き又實も數百千粒ありと誦らんに信すること難し喩へその芥子粒を破りて見ても何もなければ怪むは道理なり我等一生の造悪は芥子の實を蒔くがごとし死後三惡趣に墮ちて無量の苦を受くるは莖のひ花さき實のるがごとし然るに未來の苦果の花報實報を知らざるゆへに後世なし地獄なしと疑ふは芥子を見ぬ國の人の花さき實のるを怪む如く一往は憐むべき次第なりといふへし

◎めぐる火の輪

旋火輪といふは火繩に火をつけてくるくると回はして振れば一つの火輪を生す此火の輪は固より實體なしといへども火と火をつけたる繩と振り廻す人との因縁集まりて誰が見ても一つの火輪なり此の火の輪いつれを始めいつれを終りそこれ因縁相續

して實體なきことかくの如し此諸法實相の理を知らざる迷人は小兒の旋火を實の火輪と思ふ如く元來實なき因縁假和合の萬物を見て實物なりと執着しその始を尋ねその終を求め之を上帝の能造と信し又は天命など、摸索するは氣の毒千萬といふへし

◎酒と砂糖

酒は辛く砂糖は甘し人あり之を嘗めて忽ちに斷定して曰く酒は辛ふして嘗め難し砂糖は甘くして食し易しと酒真に此人の斷定の如くは今日街頭に酒肆を見ざるへし然るにその然らざる所以のものは難易その人に在つて物に非るなり若し好飲家をしていはしめば酒は飲み易し砂糖は嘗めかたしといはん同しくこれ酒なり砂糖なりといへどもその嗜好を異にすれば一物にして難といはれ又易と呼はる佛万機の爲めに聖道淨土の教を説く亦た故ある哉

◎綿打と時計

綿打はピン〜と音のすれども飲の間用の間は間斷あり時計のセコンドの音は晝夜に間斷なし自力の念佛は綿打の如く精出して稱へても心に間斷あり他力の念佛は時計の如く不斷相續す

◎鳴瀧の月

なる瀧のよるの嵐にくたかれてちる玉ことにやどる月かげ「これ月は一ツなれども散る水玉ことに影をやどす天理の妙用仁は一ツの仁なれども萬人みなこれを持もつ

◎植木の水

植木の葉や枝に水やると根へやるとは違ひあり麥の穂や葉に肥やれば枯る「よしあしの枝葉の詮義いらぬものとかく心の根をは知れかし」本心の根を養ふべし

◎口を慎むべきの喩

舊樸警諭經に云く昔し鼈あり枯旱に遇ふ湖澤乾渴自ら食むる池に致ること能はず

時に大なる鶴あり来て其邊に住す鼈從て哀れみを求て相濟度を求む鶴之を啄み飛んで嚙んで都邑を過く鼈聲を黙らず問ふ是れ何んと云ふ所を頻りに問ふて止まず鶴即ち之に答ふ口開て鼈墮つ人得て屠り食ふ夫れ人愚頑にして口を慎まず自ら過を招く亦是の如し、

詠 護

◎大さか歌

豊太閤秀吉武を以て國を取り後に文を以て世を治めんとす務めて猛勇の將士に和歌を學ばせんとすある時黄金十枚を賞として大きな歌を讀ましひ細川玄旨法印命に應じて忽ちに「不二山を枕になしてねころべは足は堅田のうらにこそわれ」流石に法印出來たりと賞すソナ事は小さいと呼ぶものありこれ横紙破りと字ある荒大名の一人福島左衛門太夫正則なり「日本にはびこるはどの梅に來て天地にひびく鶯の聲」

コハ珍らし、正則面白くよみたりと賞を興へんとすソナ事は小さいと呼ぶありこれ何者を朝鮮の船軍に内外人の眼を驚かし膽を寒からしめし加藤左典厩義明なり「大海を酒のかわりに呑みはしてあたり山をつまみ喰する」實に義明妙なり賞は汝の物と大閤を興へんとすソナ事はまだく小さいと叫ぶものなり諸人誰ならんと目をそげはこれなん千歳の今日迄忠勇無双の鬼上官清正公太神儀と人も信仰する加藤肥後守なり「須彌山に腰うちかけて世界をば呑めと喉にはさわらさりけり」いかにも清正大きなりと黄金は既に掌裡に歸せんとす大閤のうしろよりチヨコくと出たる男ソナ事は少さしくと呼ぶこれ何ものぞかの曾呂利新左衛門なり「須彌に腰かけて世界を呑む人を小指の先きてはね飛しけり」一座大に笑ふ黄金の袋は新左の手に入り終る、

◎長し短し

氣の短い亭主が女房を叱りそちの様に氣が長くては困るといふ此亭主の思ふやうに

女房も氣みじかく息子も嫁も番頭も小僧も飯たさまて氣が短かいと番頭は直の極らぬ内に請取をかく小僧は客先の分らぬうちに荷物をつぎだす夜は夜半から門の戸明る燈たしくやら飯たくやら夜明に朝めしくふて八時に午飯正午に夜喰濟ませてすぐ一時に寐る家内中が走り回りにて氣のせくまゝに飯はこげる茶釜の下はくすばる土瓶はうちわる油壺はひつくりかへす何のことはない一年中煤拂のやうならん又夫婦も子も奉公人も揃ふて氣が長いと中々箸持て飯は喰へず晝時分に小僧が起きて戸を明ると番頭も漸く目をこすりく起きて齒をみがくに二時間もかゝる女房が寢所からモ一そろくと起きませうかといふと亭主は寢言半分は晝にもならぬに起きてどうする下女はぬからぬ顔で一向夕めしと一緒に茶釜の下をたき付けませうといふコレではトンと家は立たず人の氣質にいろくありてしかも和合するこそその一家繁昌の基なれ、

◎三人片輪

盲目と聾と瘖と三人常に友たり盲目がうたへは瘖が拍子取り聾が舞ふ三人例の酒宴を開きたる最中に近火あり盲目聞き付けて逃んとするに方角しれず瘖は火の手を見て騒げども立つ事あたはず聾は平氣にて火事の方に尻むけてゐて逃んどもせず既に三人必死の時に人あり來りて目くらに腰ぬけを負せ聾に手を引かず瘖は脊中から聾に方角を指さし示せば聾は火事と合點して目くらの手を引き走り出す盲目は方角は知らぬとも足は達者なれば瘖を負ひ聾に手を引き走りて危きを逃れたり人各々長所あり和合して國治まり家齊ふ

◎時鳥

老人五六人寄りて時鳥を待つ村雨の夜更に追々の身の上話をなし泣き言をいひ合ひたり曉近くなれど一聲も聞かずモー鳴きさうなものと窓を明けたれば庭の木に時鳥がゐてサテ〜お前達が餘りなくからオレは鳴きおくれた

◎幽霊志願

生前嫉妬深き女頓死して地獄へゆき、何卒幽霊になつて是迄つれなくせし夫に恨みを返へさんと、恐るゝ閻魔王の御前へ出で、幽霊の願を訴訟すれば、閻王つくゞと女の顔を御覽あつて「これよう承はれよ汝その不器量にて幽霊になりたきなぞとは言語道斷聞き届け難し下れ」と大聲に叱りつけられ恐れ入りて頭を低れるを後ろに控へし赤鬼不憚に思ひ、女の袖をそつと引き「これ化物と願へ化物と願へ」

◎遠耳と遠耳

至つて耳の遠き親爺是れも頗る耳の遠き息子に向ひ「これ忤今おもてを通つた人は横町の太郎兵衛さんじゃないか、息子「お爺さん何を云ふ、あれは横町の太郎兵衛さんだよ、親爺「ウンッーか己はまた横町の太郎兵衛さんかと思つた、

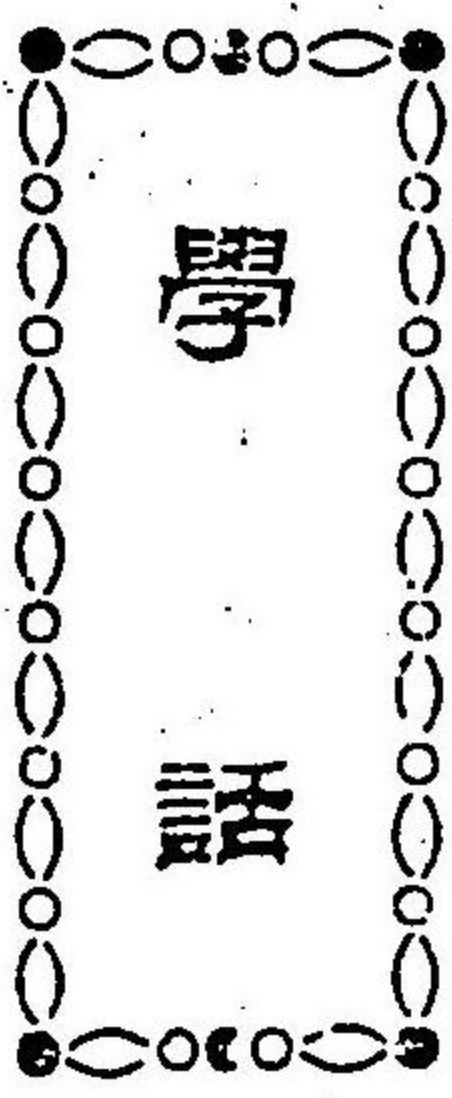
◎險呑な醫者

ある人往來を歩みけるに偶々町内にて評判の蕪醫者の何か急用ありけん其の人に突き當り足蹴のまゝ走り去りけるにぞ其の人やう〜起き上り大に怒り、直ちに懸合

に赴かんとしけるを、友なる男止めて、扱々汝は幸ひなる男かな、彼の醫者殿の足に懸けられたればこそ少しの怪我もなくして済みしなれ、若しもその手にかゝりたらんには一命も危ふかりしならんにと語りける

◎飯の上の蠅

或る家の板圍ひに常に樂書きをする者あり、主人怒りて「此の處樂書無用」と罵々と張り出しけり、然るに何者の所爲にや其の下へ「承知仕り候」と樂書しけるとな



◎論理學入門 (承前)

こゝに人あり(イ)の命題即ち特稱肯定命題を以て
或る人は死す

と云ふに、これに對して(オ)の命題即ち特稱否定命題を以て

或る人は死せず

と云はむかこの論戰は(イ)の勝利たることは何人も疑ひを要せざるべし凡そ人として無常の風に誘はれざるはなく無常の風に誘るゝもの誰かは死なからむ人は必らず死すべきものなり、すべての人死すべきものならば其の中の或る人を死すと云ふは當然の事なれば此の論戰に於ては(イ)の勝にして(オ)の負けたるや言を要せず、されど(イ)の名題を以て

人の中には佛教を信するものもある

と云へばこれ「或る人は佛教信者なり」と云ふと同じきなれどこれに對して

人の中には佛教を信せぬものもある

と云はむかこれ(オ)の命題にして「或る人は佛教信者に非ず」と云ふなり、されど此の場合に於ては双方ともに「どもつとも」として何れも非理にはあらざるなり、此の(イ)と(オ)との關係を小背反と云ふ、此の場合には双方ともに非理なること決し

てなくして双方共に真理なること少からざるなり、尙ほ一例を擧ぐれば、

万物は差別なり

と云ふも非理ならぬとまた

萬物は差別にあらす

と云ふも理にあらすさればとて双方非理かと云ふにこれもまたさにあらずして双方共に真理なり、萬物は差別即平等なり、さてまた(エ)の命題即ち全稱否定命題を以て

總て人は非情にあらす

と云ふに對し(オ)の命題即ち特稱否定を以て

或る人は非情にあらす

と云ひ又は(ア)の命題即ち全稱肯定を以て

人はすべて有情なり

と云ふに對して(イ)の命題即ち特稱否定を以て

或る人は有情なり

と云はむか、この關係を論理上にて差等と云ふなり此の場合に於ては云ひ出したるものも反對したるものも其の肯定たり否定たる點に於ては同一なるも一は全稱にして他は特稱たるなりこの時には双方共に真理たることを妨げず何となればすべての人が非情にあらすむは其の中の或る人か非情にあらざるは明らかなる事にて又すべての人が有情なれば其の中の有る人の有情たるは云ふまでもなしされど(ア)の命題を以て

總ての人は佛教信者なり

と云ふに對して(イ)の命題を以て

或る人は佛教信者なり

と云はむか又は(エ)の總べての人は佛教信者にあらすと云ふに對して(オ)の命題を以て或る人は佛教信者にあらすと云はむかこれ(イ)と(オ)とは真理にして(ア)と(エ)とは非真理なり解し易くこれを云へば全稱の命題真理なれば特稱の命題真理な

るべく特稱の命題眞理なるときは直に全稱の命題を眞理なりと斷ずる能はざるなり、左に讀者の便を計りて以上論戰勝敗の數を一目瞭然たらしめむためこゝにこれを示さむ

背反 (アとエとの場合)

此の場合に一方眞理なれば他方は必らず非眞理なれど時には双方共に非理なることありと知るべし

小背反 (イとオとの場合)

此の場合には一方眞理なれば他方は必らず非眞理なれど時には双方共に眞理なることあり

差等 (アとイ若くはエとオとの場合)

此の場合には全稱命題(ア若くはエ)眞理なれば特稱命題(イ若くはオ)は眞理なりされど特稱命題眞理なりとも必ず全稱命題を眞理なりと斷ずべからず

乖反 (アとオとエとイとの場合)

此の場合にて一方非眞理なれば他方必らず眞理にして一方眞理なれば他方は必らず非眞理なり

以上の説明はいと簡短なれど讀者靜かにこの關係を沈思せば論辨の術に於て大に得るところあらむ、

◎貨弊の話 (下)

○附たり金貨本位の事

貨幣流通の事を語るに就てはこゝに讀者の記憶を要する法則ありこれをグレシヤムの法則と云ふこれはグレシヤムといふ人の格言にて不良の貨幣は毎に良貨幣を驅逐すとの言なり、前にも云ふ如く一國の流通貨幣中本位貨に補助貨とあり又は復本位とて金銀を双用する制度もあるなり、さて此のグレシヤムの法則と云ふは一國に二個以上の貨幣流通するときは悪しき貨幣のみ其の國に止りて善き貨幣は外國へ遁け去ると云ふことなりこは實際にて現に明治の初年に我が國には金銀を双用せしが價

の安き銀のみ國に残りて價の貴き金は遠慮なく外國へ行きしなり、その善き貨幣悪き貨幣と云ふは地金の價高きは善き貨幣にして地金の價安きは悪き貨幣なり例へば現今日本にて一圓の金貨は外國に流通するときには銀貨一圓八九十錢と同一の價あるを以て法律上定めたる價は同一なれども實際金は價高くして銀は價安くなり其の結果外國へは金のみ行きて國內には銀のみ残ることとなりたるなり、もとより金と銀とは同一の量にて同一の價あるものにあらず日本が現今の貨幣を鑄造せし頃は金一は銀十六の割合にて金の大きに十六倍したる大きにて銀は金と同一の價ありしが其後、銀の價下落して今日の所にては金一銀三十二に達し殆んど當初定めたる價額に二倍するに至りこれまで通りにては銀貨一圓は一圓の價なく金貨一圓は銀二圓と同一ならむとするを以て其の極物價の騰貴となれり、何故に銀の下落は物貨騰貴するかと云ふに貨幣は己にも話したるか如く物品交換の不便を助くるための標準に過ぎねば從來某々の品を一圓にて賣りたるもその交換すべき銀一圓が一圓丈の價なくなりしにのけては其の一圓を以て買はんとするに從來のまゝの物品を渡すときは

賣主の損となるを以て物品の量を減じて其の銀貨の價額と相當するやうになさるへからず、一圓で賣りしものも一圓二十錢となり一圓五十錢となり終には二圓近くにもなるものなり、之に反して銀貨の價騰貴せむか從來一圓にて賣りたる物品は九十錢にて賣らざるへからず九十錢は八十錢八十錢は七十錢と低落しゆくなり、即ち物價の騰貴し又は下落するは一は此の貨幣と物品との平均を得ると得ざるに在るものなり、されば此の貨幣にして上下高低定りなきものならんか物價の高低も亦た定まらざるなり、こゝに於て貨幣は成る可く價額の變動なきものを撰はざるべからず、これ我か邦か變動定りなき銀貨を本位とすることを廢して金貨本位を採用したる所以なり、尙ほ此の事を精く説かんにはなかく盡くべくもあらねば一先づこゝにて筆を擱くことゝなしぬ

◎文明の字義

文明とは如何なる義ぞ英語に (Civilization) とて世の開明に赴くの謂なるがゼルツ

シト氏はこれに定解を下して

文明とは智徳の完全平均を得ることなり

と云ひき、畢竟此の世の中には道德の力と智識の力とあり此の二の力時々衝突することありて智識進みしか故に道德衰ふるの例なきにあらず、此の智識の力は社會の活動力にして之に對する道德は社會の靜力なりかく動靜の二力即ち智識と道德と完全平均して眞正の文明とはなるものなり、佛とは自覺覺他覺行圓滿の謂にて彼の悲智圓滿と云ふは智徳の完全平均なり、この境界をこそ文明とは云ふなれ、智識のみに傾きて道德の衰へたるを眞正の文明とは云へからずと知べし、カント氏も亦た人間の進歩に就て語て白く吾人か今后漸く進歩するに従ひ人生の理想を心に立て、これを信仰するに至るへしと以て文明の字義を知るに足らむ、

◎動物と植物の區別

宇宙の森羅萬象其の數多しと雖これを大別して人の作りたるものと自然に存するものとの二とならざるを得ず即ち自然物と人爲物これなり、其中天然物を分ちて生物と無生物との二とす生物とは生死あるものにて非生物とは生るゝこともなく死することなき金石の如きこれなり、此の生物更らに別ちて動物と植物との二とす、

されど此の動物と植物との區別は一見いと易きに似て其の實然らざるものわり日常目撃するものにては犬と云ひ松と云へば一は動物他は植物と明かなれと試に珊瑚の類をとり來らんかこを植物と見るものいと多きも實は一個の動物にしてパチルスパチルスの如きは病毒の虫など云へど實は松茸同様の植物なり、されは如何にして區別すべきやと云ふに最下等の動植物は判然區別すること難けれど今更其の區別を云へば植物は大氣若くは水を以て生活し動物は他の生物を食つて生活すと云ふより外なきなり

史談

◎優婆鞠多老尼に呵せらる

傳燈第四祖優婆鞠多是第三祖尙那和修に見ゆて出家を求るに尙那汝の年幾許なりや
 と問ふ答て曰く十有七と尙那曰汝の身十七性亦十七なりや鞠多曰く師の髮白し心も
 白きか尙那その法器なるを知て弟子とす後に傳燈して人民を濟度するに應果を得る
 もの、名票（長サ四寸の札）一丈六尺四方の石室に満てりといふ世舉りて無相好佛
 と尊敬せり利物度生の善巧量りなく智識才能限りなしといへども品行に於てや、闕
 る所あり素より今日の僧侶の坐花醉月に比すべきに非れども佛在世の如法なるに比
 すれば少しく輕躁の行ありしをいふのみ嘗て生存せる佛の眞弟の老尼を訪へるに尊
 者の侍僧誤りて佛前の油を翻へす老尼鞠多に對し佛在世の弟子はその威儀正しく却
 止の嚴なる行くに足の音を聞かず開くに戸の響きをなさずと鞠多親しく佛誠を受け
 し如く接足作禮謹て命の忝さを謝せしといふ老尼は佛の眞弟といへども朽枯の
 二嫗のみ傳燈の大導師に對し諄々教を垂るゝ古人の私なきを知るへく尊者の喜て
 教を受るもの私なき實に欽慕の至りに堪ぬす今日本山當路の龍象猥りに職權を弄し
 て末派の風波を起なきか學林教靈鳳雛の漫りに開化の時勢に走りて塵暴の行爲を露
 はすなきか請ふ反省せよ

◎耆域舊偈を説く

晋惠帝の永平年間沙門耆域印度より洛陽に來る兵亂に際し本國に歸らんとす衆人一
 言を留めて永く誠めどなさんと請ふ請に應して高坐に昇りて曰く

守レ口攝レ意身莫レ犯 如レ是行者得レ度レ世

と忽ちに辭し去る耆域師の此偈を唱ふる三才の小兒も暗誦すへく百才の老僧も行ふ
 に難し佛教の隆盛は堂宇の壯觀僧尼の衆多を謂ふに非ず實際に世を益し人を利する
 にわりその利益するの大本は學識品行なり沙練師曰く晋の沙門は道德に富むと法運
 の盛衰それたゝこゝにあるか

◎道昭火葬を創む

人皇三十六代孝徳天皇白雉四年道昭勅を奉し支那に入る唐の玄奘三藏に謁し又惠滿
 禪師に隨ひ楞伽の妙旨を傳承し歸朝して専ら布教に従事す而して大法を弘通せん

は先づ世を益し民を利するに在るを悟り普く天下に周遊し過るところ山を開き井を掘り渡りに船を設け川に橋を架す今も山城宇治橋の如きは道昭の造る古蹟とかやこれ慈悲は佛門の通規慈善を以て布教の一助となすは拔苦與樂の良法且つ日本火葬の創始は師の偉業にして持統天皇その益を知りたまひ天下の先導となりて此法に依りたまひしより以來文武元明元正桓武等三十八代の聖主皆火葬したてまつれり舊幕の末路君父の遺骸を焚くを不忠不孝とするの論者ありこれ一を知て二を知らざるの僻案のみ君父の遺骸を焚くは忠孝の誠情よりその遺骨を永世に存せんためなり近く諭へは塀の板柱の如き焚けは久しく保つての理あり又米の如きも乾飯焼米として數年を蓄ふ地境山界に炭を埋めて印しとすれば數百年腐ることなし火葬の如きも然り一は君父の遺骨を存し一は葬地を減するの便法なり往年一時火葬禁止の令出て墓地の乏しきに苦しみ傳染病の所置に惱み遂に再び火葬を公許し千歳の下に至りて始めて道昭の偉業を知る近來西洋にも日本の法を學び火葬を創むと道昭師の古今の卓見深く仰ぐべし

◎上杉謙信の機縁

上杉輝虎天資勇敢にして軍術を精練し嬪侍と同處せず、常に跣坐を習ふ、永祿中京師に上りて將軍足利義輝に謁す、義輝命じて管領職を掌らしめ北陸數州を領せしむ、輝虎暇日には諸山の禪將を迎て心要を諮詢し自ら得たりとなし頗る自負の心あり、偶々越後春山の林泉寺に益翁宗謙禪師あり、洞上の耆宿なり、機鋒觸る可らず、輝虎これを聞き行て之を抑へんと擬し微服して山に到り衆に隨て入室す、師達磨の公案を擧す、衆下語法戰して鋒を交ゆ、師、輝虎を顧みて曰く達磨不識の意旨什麼生か會す、輝虎答ふるなし、師曰く太守尋常口吧々たり這裏に到て什麼にして説破せざる、輝虎憤然として汗下り始めて慚服す、師曰く此の事に相應を得んと要せば直に須く大死一回して始て得べし、輝虎退て參すること數月にして省あり、徑に往て山に入る、師、其の來るを見て即ち曰く且喜すらくは太守漆桶を打透せり、輝虎下拜す、確髮して自ら謙信と名く蓋し益翁謙公の徳を慕ふてなり、天正六年三月

疾に嬰る十三日左右に謂て曰く

四十九年夢中の酔、一生の榮耀一杯の酒

言ひ畢りて卒す、號して不識庵と云ふは當時達摩不識の公案によつて省悟せしを以てなり

◎日本佛教傳通小史(三)

三界一門樓主人

平安朝の佛教(下)

平安朝の佛教は天台眞言の二宗大に勢力を得て我が日本の信仰社會を支配せしが此の頃にはあまりに唐制を模倣せるものから我が國の政治は頗る文弱に流れて武備なく僧侶は歴代に好遇せらるゝを幸ひとして私意を振ひ、僧官僧位など云へる位階は僧侶を俗化して其の爭奪に忙はしく俗人は只管僧侶の祈禱を以て萬事を醫治するものとなし疫癘も大風も洪水も早魘も悉くこれに依頼してこれか備へをなさず、盜賊

は公行して花の都の平安も修羅の巷にもやならむとするに於て、加へて僧侶も亦た武器を藏して各々其の寺を守りて一方の勢力とはなれりけり、こは佛教史上慨くべきことなれどこれにはまた深き理由の存することあるなり、そは何ぞと云へば當時政府は全く藤原氏の專權に歸して俗は藩閥を貴び、地方の豪族はいたく輕蔑せらるゝ有様なるを以て志ある人々は其の醜勃の氣を散ずるに所なく身を佛門に寄せて自由の天地に逍遙せんとしたるなり(これ其の一)かく盜賊公行するを以て寺も亦た自ら守らずば他の爲めに攻撃せらるゝの不幸に遇ふことあればそれに備へんが爲め武器を藏する(これ其の二)に至り且つや平安朝の初めにあつては僧侶を度するの規則嚴かなりつれど其の規則もやうやくゆるみ私度の僧益多きを加へたる(これ其の三)尙ほ武門の人々等か中年以后出家せる高官の人々は出家の後も尙ほ從者を連れたる(これ其の四)などの理由にて僧兵なるもの出來るに至れり、かゝる時勢に際して平將門は東に藤原純友は西に反し、平忠常反し、奥羽反し、こゝに武家の勃興となりて世運は一變し、一變して保元の亂となり、源平二氏の争ひとなり、平氏其の

權を弄してしかも又源氏の爲めに亡ぼされ干戈倥傯止むときなきに至りければ厭離穢土の念旺むに未來を思ふの心切なるより宗教の思想は盛なりつれど僧徒は前にも述べたる如く武器を弄して延曆園城興福東大の諸寺互に争ひて政府の命令を奉せざるのみならず、其の宗とする所の天台眞言の教義共に理遠く旨深きが故に到底戦争を事とする當時の人心に適すべくもあらず、人は皆な如何して平易なる宗教を得て其の安心立命の地を得むとせり、此の氣運の未だ熟せざるに大原の良忍上人は融通念佛宗を唱へ一切の功德融通して彌陀の名號中にあり往生成佛の要法はたゞ念佛にありと云へり、上人は尾張富田の人、姓は秦、年十二にして叡山に上り剃髮受戒して台教を受け嘉保二年大原山松林院永縁の室に入り又永竟に従ふて密灌を受け兼ねて音曲を誦練し淨土の法音を究む、古今聲明を習ふもの皆な上人を祖述す天承二年春二月六十一の高齡を以て寂す聖應大師と諡す、これより先き惠心僧都源信上人あり横川に屏居して一乘要訣往生要集等を著はし醍醐帝の皇子空也上人念佛を以て天下を周遊すこれを空也念佛と云ふ、これらもまた易行の法門の起らんとする曙の光とも見るへし、曙の光はいとあきらかなれど未だ天、曉に至らず、こゝに於て圓光大師法然上人は出で玉ひぬ、法然上人は美作國久米郡稻岡の人、叡山に上りて源光に投す源光これを見て曰くこれ駿兒なり到底我が朽ちたる索もてつなぐべからずとて皇國阿闍梨に従はしむ、上人これを師として剃髮す、時に年十五、三期にして台教に通ず以爲らく我れ名利の學を屑とせずと黒谷の叡空に従ひて初めの名源空を改めて法然と云ひ密乘及び大乘律を受け刻苦勉勵自ら云ふ讀書三遍して其の義自ら彰らかならざるはなしと晩に惠心の往生要集を読み豁然として悟る所あり奮然淨土專念の宗を唱ふ、蓋し末世の衆生鈍根にして難行道の修し難さを看破して、に易行一道を開きしなり、此の宗は無量壽、觀無量壽、阿彌陀の三經を以て所依とし無量壽佛を專念して往生淨土を期するを目的とす、法然上人か此の易行の一道を開くや高倉帝召して宮中に入れ戒を受け玉ふ、相國藤原兼實の淨土の事を問ふや爲めに撰擇集を著はしてこれを答へられき、後、南北衆徒の誣告により讃岐に流さるゝや、上人少しも憂へず揚言して曰く吾れ此の禍に遭はずんば如何にぞ專修の道を海裔に布

も見るへし、曙の光はいとあきらかなれど未だ天、曉に至らず、こゝに於て圓光大師法然上人は出で玉ひぬ、法然上人は美作國久米郡稻岡の人、叡山に上りて源光に投す源光これを見て曰くこれ駿兒なり到底我が朽ちたる索もてつなぐべからずとて皇國阿闍梨に従はしむ、上人これを師として剃髮す、時に年十五、三期にして台教に通ず以爲らく我れ名利の學を屑とせずと黒谷の叡空に従ひて初めの名源空を改めて法然と云ひ密乘及び大乘律を受け刻苦勉勵自ら云ふ讀書三遍して其の義自ら彰らかならざるはなしと晩に惠心の往生要集を読み豁然として悟る所あり奮然淨土專念の宗を唱ふ、蓋し末世の衆生鈍根にして難行道の修し難さを看破して、に易行一道を開きしなり、此の宗は無量壽、觀無量壽、阿彌陀の三經を以て所依とし無量壽佛を專念して往生淨土を期するを目的とす、法然上人か此の易行の一道を開くや高倉帝召して宮中に入れ戒を受け玉ふ、相國藤原兼實の淨土の事を問ふや爲めに撰擇集を著はしてこれを答へられき、後、南北衆徒の誣告により讃岐に流さるゝや、上人少しも憂へず揚言して曰く吾れ此の禍に遭はずんば如何にぞ專修の道を海裔に布

くことを得むと居ること五年にして赦され八十の高齡を以て寂す、今日全國に尤も多數の信徒を有する淨土眞宗の宗祖親鸞上人は實に此の法然上人か徒弟たりしなり予は次章に於てこの眞宗及び殆んど同時に傳來せし禪宗に就て語る所あらんとす、此の平安朝の末は以上述る如く佛法は異様なる發達をなしたれど其の間また高僧の輩出するものなくむばあらず、戒律の中興たる中川の實範あり眞言宗新義派の祖師覺鑿上人あり外に皇子にして天竺に渡らんとし途中に薨じ玉ひし高岳親王ありこれらは別に説く所あるへし

雜 録

◎説教の心得 (承前)

土 岐 善 靜

一粟津義主といふ眞宗説教の基礎をなしたる先輩の説なりとて十余條を抜萃して贈られし蜂川讓氏の厚意を謝し原文の漢を和に述べ書す 善 靜 識

- 一物は世を以て殊とに世は物を以て殊なり法談もまたかくのことで今を論すれば古に異なり初學先つ力を學に須ひよ本立て道生す
- 一初學は先つ人道を學ふへし孝悌忠信の道を知り能く苦樂七情の趣きを得て後に分離の一道に及び我門の安心の語らは所として服せざるなし
- 一聽者の差別を知るへし曰く士農工商曰く賢愚老幼まさに法を談せんとすよくその機類を察し時に應じて説くを至要とす
- 一古事因縁を語らんには尊卑上下賢愚輕重清濁吳漢の二音等よく注意して詳にすへし然らされは南蠻鳩舌の如し
- 一法談の時に或は目を閉ぢて語るものあり甚たあし、聽者を見ずして豈よく應變を知らんや然れども又目を見張りて左右に首を振るも甚た不体裁なり
- 一初學坐に臨むには大膽を要す聽者を見ること聾者瘖者盲者に對する思ひをなすべし然らされは恐驚の心生することあり
- 一替題は聲の低きを要す高聲なれば喧々として聽者の頭上を飛び越し説聽の心騒々

しく静かならざることあり

一 規矩を以てせされは方圓を成すあたはず經論及び先徳の法語の簡要を取り錯綜を考へ記憶して自辨を以て語るへし始めは口訥にして進みがたし然れども日夜辨談して倦まざれば力を用ゆるの久しきその妙自然にして得べきなり

一 法談の時傍に先進の僧侶あれば懼るゝこと豺狼の如し同穴の狐にして決して恐るべきにあらず

一 法談の中に即ち所といふ二字を多く用ゐる或は痰咳を始めより終りまで多く用ゆる最も害中の害なりよく慎むべし

一 道心あるを要す道心なきものゝ法談はいかに花やかなりとも實あることなし嗚呼たい名利の奴隷

一 法談もと學者に出て又學者の知る所に非ず別に不可説の妙處あり唯佛教のみを語りて人道に暗らければ變化をなしかたし聽者皆齷齪す實に文質彬彬々たれ

◎演説の心得(承前)

加藤 咄堂

一 英國の文學博士ダビットチャールズヘル氏が「近世演説者」と云ふ書に演説者に必要なる七種の性質を論せられたりと聞けり、今其の要を摘みて云はむか

(一) 演説者は常に人を感動せしむるは其の意思に訴ふるにあることを服膺して終始聽衆の好意を得ることを勉めざるべからず、かく云へば何となく演説者が卑屈になりたるやうなれど如何様の演説にても聽衆に嫌惡の念を起さしむるときは其の演説はこれを聞くの人なくして、よし名論卓説を吐くとても其の功なくして了るべければこの事は第一に注意せざるべからざることなり

(二) 演説者は先づ如何なる論法を以て最も聽衆を感動せしむるかを考へざるべからず、若し然らずして唯だ自己の思ふまゝの論法を以て演説するときは聽衆に何等の感をも動かさしむる能はざることあるなり、クインチリアン曰く温良の人に對して徳行を勸むるは易し、粗暴の人に對してこれを説くは難し、

これらの人に對して徳行を勧めんには徳行の貴ぶべきを説くより寧ろ徳行より得たる名譽の大なるを説くべしとまことや利を好むものは利を以て説き名を好むものは名を以て説く釋尊も應病與藥と仰せられ其の病に應じて藥を與ふるの覺悟は演説家に欠くべからざる所なり、老人を捕へて哲學の講義をなし小供に向つて佛教の玄理を説くは痴呆の事なるへし

(三)演説者は慈眼視衆生の覺悟を以て演説せざるべからず念々唯だ聽衆を利すべきを思ふて他を思ふ勿れこの覺悟あるときは言々肺腑より出で、友愛の情人を感せしむるに至るものなり、演説をよくせんと思ふなかれ如何にせば解し易からんと心懸けよ、演説者に此の親切あれば聽衆も自然に感動すべし、言語を華麗にせむ、態度を正しくせむとそれのみに心を勞するは事に益なきことなり

(四)演説者は博覽多識ならざるべからず、こは云ふまでもなきことなれどつけ焼く又は剝げ易きものにて無暗に博覽多識ぶりて己れもわからぬことをへろへ

と曝るは利他の考へなきがいたすところとはいへ却て己れの淺學を吹聴するものにて其の演説に身の入らぬものなり、自信教人信ともいへば演説せんとする問題に對しては己れは充分に其の事を知り若くは信じて居るを必要とするなり聞きかぢりの演説や新聞雜誌の論說再演は見苦しきものなり

(五)演説者は少しも故造作意の狀あるべからず、世には己れの所説を助けんか爲めわざと事實を作りこれを述るものあれどそは斷じて避くべきことなり、且つ心こゝにあらざれば云へども人を感せしむるに足らぬば演説者は専心一意其の事を演説するの外他の事を思ふべからず、聽衆の欠伸、窓打つ風などの目につき耳に入るは自らが不熱心ぞと心得べし

以上はチャールズ・スベル氏の書により少しく愚見を交へて演説者の要すべき性質を説きたるなるが該書には尙ほ二の性質を擧げてこれを説きつれど其の二は共に議會内に於て必要のものにて佛教演説としては要なければこゝに省さぬ、
一演説練習に就て注意すべきこと五つありそも亦た此の書に説きたれど今は寧ろ予

の意見として説く便なるを信ず、故、如何となれば此の書は主として政治演説を説き且つ泰西の風なればこれをそのまゝ本邦に應用して佛教家演説練習の注意とするには頗る不適當なればなり

(一) 日用談話の際には注意して成る可く地方語を避け「かた言」を云はぬやう用心すべし矛盾を「ホトトン」と云ひ緊急を「チンキユウ」と云ふか如きは皆な日用の注意足らざるが故に演壇に登りたるるとき思はずもかゝる語を出すにはいたれるものなり予曾て某地に演説せしに前席の辨士「佛教は厭世教にあらす」と題して厭世を「アツセイ」「アツセイ」と云ひ居れり予後にてこれを咎めければ辨士ソトデスカ私は應制政府のアツセイかと思ふたとかゝることは間々あることなり注意すべし、これを注意せんには日用の談話に氣を付くる第一なり

(二) 多く先輩の演説を聴くこと演説の呼吸と云ふものは教ぬたりとて解るものにあらず成る可く多く先輩の演説を聴きて自得するを肝要とはなすなり、多く聴きゆく中には妙處くもわかりて終には自己も亦た先輩の中に入るを得るものなり

(三) 多く聴くと共に多く演すべし多く聴きたりとして自己多く演せずは其の甲斐なし自ら立ちて一場の演説を試みるべきなり、人なき室の中又たは朋友を相手に、或は山の頂などにて演説しみるべし、初めは可笑しくて出来難けれど終には平氣に演説することを得るやうになるものなり、予の知人某氏は一室の中にて鏡に對して演説して上達せられたる例もあるなり

(四) 先輩のなせし演説筆記の中尤も完全巧妙と思ふものを撰びてこれを讀みて暗誦するにいたるべしこれを暗誦して其の体度音調等を倣ひて練習するも一法なり、されどその暗誦を公衆の前で演ずるはよからぬこと、知るべし

(五) 作文に力を盡すべしベーコン會て曰く作文は精密の人を作ると常に作文に心懸くるものは演説の組立にも困難を感ずること少かるべし、今や演説練習に必須なる學科を擧げ、論理學、美辭學の如きは尤も其の急なるものなり此

の二學の事は別の欄にて説くべけれと演説者はこの二學を忘るべからず、美辭學は言語を華麗にし論理學は論旨を明晰にす共に廢すべからざる學科なり一演説はペロ／＼喋るべからず、句調に注意して時々これを切るべし、春の海の波たぬ如き演説は人を倦ましむ時に怒濤來るか如くなるべし、怒濤のみの演説は人をして忌ましむ時に春の海の如くなるべし、これ用心なり

◎七大宗教大意

曩きに本書第一卷に於て耶蘇教大意を掲載したりしを以て本卷に於ては自餘の宗教即ち猶太教、波羅門教、火教、回々教、儒教、道教、神道の七宗教の大意を掲げ諸氏の參考に資せんとす。

一、猶太教は猶太人種特有の宗教にして自然に發達し、アブラハムの受けたる神命と、モゼスの神より直受せる十戒とを主とせるものにて、唯一上帝の存在を信じその神は人間の行爲を洞知して善を賞し惡を罰し玉ふことを信じ、豫言者の首導者

をモゼスとなし、モゼスは萬古不易の授法者たるを信じ、世は當さに救ふべき主の出づる時あるべしとなし其の時こそは死者の靈魂再び蘇生し來るべしとなすものなり、舊約全書を信じ經文はヘブリー語を以て之を書し、寺院内の廣告文までも皆ヘブリー語を以てし、他人種の間には教法を弘通するの念なく固く自己人種中に保護せんとし婚姻は斷じて同人種の外に結ぶことを禁じ、耶蘇教の如く日曜日を安息日となさず土曜日を以て安息日となし金曜の夕土曜の朝に禮拜を行ふ、現今歐洲全土に散在して教徒實に六百三十萬人なりとす

二、波羅門教は印度固有の宗教にして、毘陀を以て經典とし、梵天の啓示に出づとなす、梵天を世界能造の主となしシヴァ神あり破壊の神ヴェイシュヌ神あり保存の神とし此の三神は無數の眷屬を有し三億の多さに達せりといふ、されど此の教を信するものは神によりて幸福を得べしと信せず、自ら難行苦行して樂果を得んとし其の極自ら忍ぶべからざる苦痛を甘むじてなすに至り、魚肉獸肉五葷酒類を嚴禁し人種を四種に區別し、波羅門(僧侶)刹帝利(官吏)吠舍(農工)首陀羅(奴隸)となし、其

の區別を嚴にし同族外の婚姻を禁せり、僧侶は毘陀を諷誦して道を修す、毘陀の外にメニユーの法典あり教徒に重視せらる、中に五誠及び十誠を説く曰く、

五誠

- 一、輕神
- 二、蔑僧
- 三、誇心
- 四、不快
- 五、不實

十誠

- 一、輕神
- 二、悖戾
- 三、慳吝
- 四、讒諂
- 五、輕薄
- 六、鄙俗
- 七、詐僞
- 八、毀体
- 九、放恣
- 十、剽盜

此の教特とに其の經典たる毘陀には高尚の哲理存し早く靈魂轉生の説を信じ万物進化の理を信ず、しかも其の奉ずる神多く其の極偶像を崇拜するの盛なる東西其の比なき宗教となりぬ、現今信徒一億七千万人悉く印度人なり。

三、火教 は波斯に起りたる宗教にして又波斯教と云ひ或は教祖の名を以てゾロアスター教と云ふ、ゾロアスターは殆んど今より四千年前の人にして父をポーラシアスパーと云ひ母をグゲダーと稱す、其の先は王族なりしが氏の生時は非常に困難な

りしと、年三十にして「イラン」に赴き沙漠中に住はること二十年なりしと云ふ、此の教に依れば天地に二神あり一をオルムツツと呼び他をアールマンと云ふ此のオルムツツは荒神にして光明を主どりアールマンは惡神にして暗黒を掌どる、此の二神常に争闘して止む時なし、たゞオルムツツを奉ずる時は惡神アールマンは遁れ去るべしとなすなり、かくて此の光明の神を代表せしむるに火を以てし之を禮拜するを以て欠くべからざる儀式なりとす、されば信徒は太陽、月及び光明あるものを拜し人類の義務を完ふするものは善神之を助け之に背くものは光明を得べからずとす、經典を「センドアヘスダ」と云ふ、波斯印度に散在し教徒實に八萬五千四百人を有するといふ

四、回々教 は亞刺比亞マホメットの顯示せる所にして猶太教又は耶蘇教の如く一神説を立つ經典あり「コーラン」と云ふ、世界三大宗教の一たり、教徒實に一億萬人教祖マホメットは西曆五百七十年亞刺比亞の「メッカ」の東に生る、父はアブダラーとて家頗る貧し、年十二にして隊商に従ひて北方に旅行し二十才の時「メッカ」

なる富人の寡婦に仕へ、終に入夫して二男四女を擧げ、靜かに基督教及び猶太教を研究し「ヒラ」の洞窟に入りて冥想默念し以て自國の宗教を革新せんとせり、かくてマホメットは「ヒラ」の洞窟中に於て天使カブリエルに會し自分神の使者なりとしこゝに初めて自教を確立せり、神は唯一なり永遠なり神の外に神なし我れは神の預言者なりと地獄と天道とを信じ、救靈の道は祈禱と巡禮とにありとし祈禱は宗教の柱なり樂園の鍵なりとし「メツカ」に巡禮するを以て神恩を受くること大なりとし今日に於ても毎年陸より二萬八千海より六萬八千の巡禮者ありと云ふ、此の教の神は善惡の報、幸不幸を與ふるの權利を有しそは全くマホメットの教義を奉ずると否とによつて決すとなし、猛然たる勢ひを以て右手に劍を携へ左手に經典を持ち戰爭を以て自教の擴張を計り一時は歐洲全土を席卷せんとせり、此の教姦淫を嚴禁すと雖も、一夫數妻を拒まず離縁は全く夫の權に在り

五、儒教 又は孔子教と云ふ、こは支那の聖人孔子が先王の法を祖述したるものにして宗教といふ點よりも寧ろ治國平天下の道として我が邦に用ひられたり、孔子名

は丘、字は仲尼、今を距る殆んど二千年前我が綏靖天皇卅三年に於て支那魯の國に生れ四方を遊歴して教を説き人倫道德を主として經世に及び仁義禮智信の五常を説き殊に仁を以て主眼となす、中庸に曰く天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教と天とは絶對を指すものにして此の天の命に率ふを性と謂ひ性に率ふを道と謂ふなりされば此の教にては他の宗教の如く未來を語らず神祇を説かず、孔子も亦未能事人焉、事鬼と云い又未知生焉、知死と云ひ堯舜太古の道を説くを主眼として怪力亂神を語らず、孔子の後孟子あり荀子あり共に此の道を祖述す、論語中庸、大學、孟子の四を四書とし、詩、書、易、禮記、春秋を五經とし之れを所奉の經典とす、しかも此の教根本の目的治國平天下にありしか故に宗教的感化を與ふること少く、多く政治の具として採用せられき、支那、朝鮮及び我が日本に行はる其の宗教と稱すべしや否やは今尙ほ研究中なりとす

六、道教 も亦支那に發生せる宗教にして老子を祖とす、老子は名を聃と云ひ楚の苦縣の人胎内に在ること八十一年にして生る、生れながら白髮にして性行龍の如く

道徳經一卷を著はして往く所を知らず、其經の開卷第一に曰く、道可レ道非ニ常道一、名可レ名非ニ常名一と、蓋し清淨無爲を喜び一種の哲學の如くなりしが漢以後に至りて他教に擬して偶像を設け、脩養仙丹符録等の術を行ひ宗教となり丁りぬ、脩養とは深山に入りて世塵を避け氣を練り心を養ひて自在を得るとにて所謂仙人の道なり、仙丹とは丹砂を得て之れを煉り天地の精英を出し之れを服すれば長生不死なるべしと云ふ、符録とは神符を門戸に張れば能く惡魔を拂去とかや、祭る所の神、主なるもの三あり三清と云ふ、元始天尊、太上老君、通天教主これなり、此の教の經典は日本に傳はり其の儀式の幾分も日本に來り鬼門、竈の神、九字の咒等の事今も邦人の宗教心を支配しぬ、されど彼の傳道師は來らざりしが如し

七、神道。は我が日本固有の宗教にして教祖もなく經典もなく自然に發達したるものなり、抑も此の道の本源は天御中主神の神化に發し高皇產靈神、神皇產靈神の氣化に顯はれ、尋で伊弉諾、伊弉册の体化に成り二神これを天照大神に傳へ大神は之れを瓊々杵尊に傳へ、尊は之れを歷朝の天皇に傳へ、歷朝の天皇は之れを繼承し、

親躬ら神事を始め、天地の化育を受け億兆に其の所を得せしめ玉ふ是れ國は神國、主は神胤、民は神裔この三相調合して我國体を鞏めたるなり、故に適切に云へは神道の本義は宗教に非ずして國家の儀式といふべき程のものなれど中古以來教義數多に分れ、且つ弘法大師の兩部神道傳教大師の一實神道は神佛兩道を調和し全國多くの神社は社僧なるものを置きて僧侶の領する所となりて漸次其の本義たる神道を離れて皇室の外、別に宗教的神道を形づくるに至り吉田流神道白河流神道など興り其の極は淫祠左道を出すに至りぬ、これ然しながら神道の本義にあらすと知るべし、此の教は惟神の大道を説き、天地の眞理は自然に具はれりとし、現世を主として未來を説かずたい僅かに高天原と月夜見國とを示して一は善人が死後に住する所とし他は惡人が死後に住する所と云ひ、大祓を實行して現世の罪惡を消滅せしむ

◎數珠の因縁及び功德

數珠の因縁功德を尋ぬるに釋氏要覽に牟黎曼陀羅咒經を引て曰く梵語には、鉢塞莫

梁に數珠と云ふ、或は念珠と稱す、是れ下根を引接して、修業を牽課するの具なり、木樓子經に云く、佛靈鷲山に住し玉ふ時、難陀國の王、波流梨、使を以て佛に言く我國は邊陲の而も少國にして頻りに兵亂あり、五穀貴く、疫病流行し、人民困窮す其の故に、我れ常に安んずるを得ず、佛法は深廣なれば、遍く行ずることを得ず、惟願くは、法の肝要を示し玉へ、爾時に佛の言く、若し煩惱樂苦を滅せんと欲せば木樓子一百八箇を貫て、常に身に隨へて、心身不亂に、南無佛、南無達磨(法)南無僧伽(僧)と稱へ(即ち三歸なり)乃ち一の木樓子を捏ぐるべし、是の如く漸次に乃至千萬遍すべし、能く二十萬遍を滿れば、夜摩天宮に生じ、衣食自然にして、常に安樂ならん、若し百萬遍を滿れば、百八の煩惱を斷除すべし、使還て王に言す、大に歡喜し、數珠一千具を作り、六親等に與へ、善業を勸導けり、王常に誦念して軍旅に出るときと雖ども、廢て置かずと、是れ佛數珠の法を説き玉ふ因縁なり、蓋し之れ佛隨機の二緣にして、佛の今新に造り出されしものにはあらざるべし、準提佛母、不空羂索、十一面觀音、千手觀音等の所持物の中にも數珠あり、復天竺事

火外道の本尊とする、火大の持物にも亦數珠あり、此等は佛以前よりあることなり、物事編に數珠は、無始本有の法則なりと云ふ、○數珠結縁の功德は、數珠功德經に云く、若し人法に依て、佛名陀羅尼を念誦すること能はずとも、但能く菩提樹の念珠を手に持し、身に隨へば、世間一切の言語までも彼の念佛し誦呪する功德と同うして、福を獲ること無量なり、瑜珈念珠經に云く、若し頂きの髻の中に安じ或は耳、或は頸或は臂に掛けば、其人の言語即ち念誦となりて、三業を淨む、又云く、若し髻に安せば、五逆罪を滅す、若し頸に安せば四重罪(殺生、偷盜、邪淫、妄語)を淨む、若し手に持し、臂に安せば、能く衆の罪を滅す、廣くは彼の經に説く就て見るべし

凡そ數珠に多種あれども、一百八顆あるを通途とす、然るに百八の珠は、母珠の兩方に各五十四顆あり、此れ菩薩の五十四位を表す、一方の五十四は本有本具の位地一方の五十四は修生修顯の位地なり、五十四顆一々に圓滿なるは、斷惑證理して、一位一位の功德、圓滿成就する義なり、次に一條の線を以て、諸の珠を貫き徹すは

一行者遍く諸位を歴ことを表す、次に母珠は佛果なり、故に數珠を捏るに、自餘の珠は、皆修行の位地なるを以て悉く捏り越すと雖ども、母珠を越へざることは、佛果より上に位なきが故に越す理なければなり、瑜珈念珠經に愼んで聽過することなけれ越法罪なりとあるは是なり、又母珠より取て還して捏るは、佛果成就して、後九界の身を現して衆生を度する義なり、又母珠の下に、一の小珠あるは、補處の弟子なるべし、其下の十顆の記子は十婆羅蜜を表す復次に五十四顆の數珠は、修生の五十四位なり、四十二顆の數珠は、四十二位なり、二十七顆の數珠は、小乗の二十七賢聖を表す、二十一の數珠は、本有の十地修生の十地及び佛果を表す、十四顆の數珠は、地前の三十心を三とし、是に十地佛果を加ふるなり、如是く皆表相あり故に經に珠を敬ふこと佛の如くせよとあり、輕しく棄觸すべからず

◎世界各国寺院僧侶の多寡

こは文學博士井上圓了氏が曾て「統計上我邦の寺院僧侶の多寡を論ず」と題して

論せられたる文中より抄出したるものにして以て本書各宗教大意の参考に供せん
とて茲に掲ぐることはなしぬ

先づ英國の宗教統計によるに國教宗及非國教宗に屬する寺院の數大小二万五千八百五十七ヶ寺（蘇國及愛國は之を除く）にして之を英國の人口二千五百九十七方に配すれば人口一千四人に付一ヶ寺の割合なり又國教宗の信徒は一千三百五十万人にして國教宗寺院の數は一万四千五百七十三ヶ寺僧侶の數は二万四千人なり故に其割合は信徒九百廿六人に付寺院一ヶ寺、信徒六百六十二人に付僧侶一人に當る又龍動は人口大數四百万と稱し凡そ三百八十餘万の住民ありと云ふ而して市中の寺院國教及非國教を合して凡そ千四百ヶ寺あり其割合二千七百十五人に付一ヶ寺に當る
以上は英蘭及「ウエールズ」の統計なり若し蘇蘭の統計によれば人口三百七十三万にして牧師千六百六十人なり故に人口二百二十四人に付牧師一人の割合なり又蘇國々教宗は信徒五十七万九千人にして會堂千六百四十二棟、牧師千七百人を有す故に其割合は信徒三百五十人に付會堂一棟、三百四十人に付牧師一人に當る又愛蘭は

大半舊教信徒なるも英國教宗の信徒も六十三万人あり而して其寺院千五百ヶ寺、其僧侶千七百五十人あれば其割合信徒四百十三人に付寺院一ヶ寺信徒三百五十四人に付僧侶一人に當る

次に佛國の統計を考ふるに舊教徒二千九百二十万千七百三人にして其僧侶五万四千五百二十六人なれば其割合信徒五百三十五人に付僧侶一人に當る新教徒六十九万二千八百人にして其牧師七百人なれば其割合信徒九百八十九人に付牧師一人に當る

次に獨國の統計を考ふるに普通新教徒一千八百二十四万四千四百五人にして其牧師九千四百六十六人なれば其割合信徒一千九百九十四人に付牧師一人に當る舊教徒九百六十二万三百二十六人にして其僧侶八千三百人なれば其割合信徒千五百五十九人に付僧侶一人に當る

次に澳國の統計を考ふるに澳大利部は信徒二千三百八十九万五千人にて僧侶四萬千九百九十五人なれば信徒五百八十八人に付僧侶一人の割合なり匈牙利部は信徒千七百三十四万八千人にして僧侶一萬九千八百八十七人ならば信徒九百四人に付僧侶一人の割合なり

次に伊太利の統計を考ふるに舊教徒凡そ二千八百萬にして其寺院五萬五千二百六十三ヶ寺、其僧侶七萬六千五百六十人なれば其割合信徒五百六十人に付寺院一ヶ寺信徒三百六十五人に付僧侶一人の割合なり

次に魯國の統計を考ふるに國教信徒七千七十一萬八千二百八十人にして其寺院五萬七百二十ヶ寺、其僧侶五萬二千三百三十三人なれば其割合信徒千三百九十四人に付寺院一ヶ寺、信徒千三百五十一人に付僧侶一人に當る

次に米國の統計を考ふるに新教信徒大數三千萬にして同會堂八萬六千三百三十二棟、同牧師七萬七百六十四人なれば新教徒三百四十八人に付會堂一ヶ所、同信徒四百二十三人に付牧師一人の割合なり又舊教徒六百八十三萬二千九百五十四人同寺院五千九百七十五ヶ寺、同僧侶六千三百六十六人なれば舊教徒千四百十三人に付寺院一ヶ寺同信徒千七十三人に付僧侶一人の割合なり其他諸國の宗教統計は之を略す左に以上

上の統計を表示して一覽に便にす表中の數字は皆信徒の數にして信徒幾百人に付寺

院一ヶ寺、僧侶一人に相當するやを示すなり

國名	寺院	僧侶
英國	一、〇〇四	
同國教宗	九二六	五六二
同龍動	二、七一五	
蘇國		二二四
同國教宗	三五二	三四〇
愛國	四一三	三五四
佛國舊教		五三五
同國新教		九八九
獨國新教		一、九九四
同國舊教		一、一五九
澳國澳部		五八〇
澳國匈部		九〇四
伊太利	六五〇	三六五
魯國	一、三九四	一、三五一

米國新教	三四八
同國舊教	一、一四三

	四二二
	一、〇七三

◎十善略説附四恩略説

百十五代桃園天皇の皇母開明門院百十七代後桃園天皇の皇母恭禮門院の兩御所
 河内國高貴寺の慈雲律師を御歸依ましく御受戒わらせられその聖請によりて
 十善法話を製作し獻納ありしが後桃園天皇の教旨として更に略説を奏上すへき
 由の勅命を蒙り製作ありしといふ貴重すへき二説を得たれば恭しくこゝに掲
 出す

十善とは聖主の天命をうけて萬民を撫育するの法なり此法近くは人となるの道に
 して遠くは佛の万徳を成就するなり
 第一不殺生戒 これは仁慈の心を以ていさとし生るものをいつくしみ救ふなり總じ
 て聖主は萬民を赤子の如く思ひ召させたまひてその恩禽獸に及ぶ事なりその身無

病長壽にして子孫繁榮なる此戒の徳なり

第二不偷盜戒 總じて天地の万物を生ずるは山には山の利ある海には海の利あり上下各々その利あることなり春の花秋の紅葉その理同じきなりこの故に百官庶民に至るまでおの／＼其利を奪ふことなくその心を得せしむべきなり國家の富榮なる此戒の徳なり

第三不邪淫戒 男女の間その道の正しきなり此道正しければ禮儀おのつからその中に具はるなり天象のあらはるゝ多くは此道なり人しれぬ身の行ひはことに天神地祇の知るところなり家の治まり國の治まる内外の眷屬みなその人を得る此戒の徳なり

第四不妄語戒 言に虚なることなきなり身にも心にも偽りなきなり普天率土みな誠を盡して聖主の教に順ふ此戒の徳なり

第五不綺語戒 世にかかる口と云ふことこれなり例をあけていはゞ子規の歌に「たや有明の月ぞ残れる」といふは正語なりそれを世の俳諧者が「さてはあの月が鳴

いたかほどゝさす」といふが如きは綺語なり此綺語は大人の徳をそごなひ天地の道にもたがふなり天地の道にたがふゆへに綺語の人は世に在りてその身に幸ひなきためしなりこれも小臣侍女の戯れ猿樂などを見聞するは咎なしたゞ戯れに過ぎぬを要とすへし萬國尊重しその勅語に違ふことなき此戒の徳なり

第六不惡口戒 人を罵りはづかしめぬなり總して大人は人をあなどらぬを要とす萬民みな天地の子なりこれをあなざれば天地の道にそむく家も和睦し四海も泰平に草木まで花菓うるはしき此戒の徳なり

第七不兩舌戒 これは他のなかごとをいはぬなり大人は權柄その身に在て功あるを賞し佞者を退く此戒おのつから全きなり君臣一体の如く下の情は上に通じ上の恩は下に及ぶ此戒の徳なり

第八不慳貪戒 一切むさばり求めぬなり何事も過去世の業の影と知れば高きも賤しきもそのまゝにて足りぬべし食はれば天地の道にそむくなり魚は餌のゆへにその身を亡し猛き虎もこれ故におとし穴に入るこれは人事なれども天命も同じきなり

國土の五穀成就し人民もゆたかなる此戒の徳なり

第九不瞋恚戒 前の食欲は福分を滅じこの瞋恚は善根を亡す前の食欲は世々の貧賤となりこの瞋恚は生々の醜陋となる相好具足し國土に惡獸毒蟲すくなき此戒の徳なり

第十不邪見戒 今日の貴賤尊卑みな過去世の業と知るへし佛あることを信し法あることを信し神祇の徳ひなしからぬを信すれば此戒全きなり三寶の冥助を得て諸福増長する此戒の徳なり

總して戒法は人々具足の徳にして今新に生ずるに非すたゞ世人の我にある寶藏をみづから知らぬ故に大聖世尊の説示したまふなり自心の徳全ければ天地とその徳を等しふして佛の大道にもかなふことなり

○四恩は人々に荷負せるものなれば已心已體に反省して必ず報謝を志すべきの道なり此道近くは世に處するの善訓して遠くは佛果に到るの善道なり

一父母恩 慈父悲母の徳は天地に比することにて我身の今日あるは皆父母の大恩な

り故に佛も我世に住すること一劫にして父母の恩を説くとも説き盡くされじどのたまへりされば古人も詩經を講ずるに哀哀父母生我劬勞といふ所の句に至れば父母生育の恩を思ひ出し嗚咽して袖をしぼりつといへり實に此二句は修身朝暮忘るまじくその存日にはその心を安んせしめ没後にはその追遠を厚くし報恩を致すべきなり

一衆生恩 大凡世間にありとあらゆる人類を始め畜類に至るまでみな我宿世にての親子兄弟なればその恩あり又現世にても今日の衣食住は皆人の手にて成りたるものなるを我受用して生存せるの恩ありその他文學技藝智術動作いづれか古今の人の造作したるに依らざらん一一觀察してその恩あるを知るべし又禽獸とても天地同體なりかれが生命を奪ひて我軀体を助くべきに非す渠が生命を奪ひて我軀体を助くべきに非す况んや妄殺すべけんや依て此衆生の恩を思ひ報謝せんと志すべきなり

一國王恩 國王は世間に於て善を賞し惡を罰したまふの政を施したまふ故に我等

侵掠劫殺の虞なく安樂に生業を遂らるゝなり依て布告したまふの政令を遵守し奉り苟且にも法律を犯し國辱となるの事を作すべからず殊に我國王は神系一統にましまし我等人民は皆その隨從の諸神の末葉たるものなれば我遠祖已來歷世の大恩あり彼の外邦の朝暮に位を易る君臣とは大に別なるの義を知りてその大恩を報し奉らんと務むべきなり

一三寶恩 三寶と云は佛と法と僧となりも我等が無明の迷倒を愍み給ふの慈悲より出たる者なれば其慈恩を思ひ佛をは禮し法をは信し僧をは敬ふべし四恩の中此三寶の恩を報するをは佛は殊に勝れたりと説きたまへり故は凡そ我等か今日苦境とするものはみなかの無明の迷倒より生せるものなるを今三寶は之に歸依し恭敬供養信受奉行する時はその苦を抜き樂を興へたまへばなり依て一向に此三寶の徳を尊重して報恩の行を修すべきなり

宋の何尙之といふ人文帝に奏して曰く百家の郷十人五戒を修すれば則ち十人淳謹ならん千室の邑百人十善を修すれば則ち百人和穆ならん此風教を傳へて已に

寰區に遍ねくせば編戶億千にして則ち仁人百万ならん夫れ能く一善を行ふ時は則ち一惡を去らん一惡を去らば則ち一刑を息めん一刑家に息まば百刑國に息まんこれ坐ながらにして太平を致すの道なり好哉言や人たるの大道を知り佛果の極位の得るもたゞこの十善なり

講壇

◎菩薩法 (去月十七日和融會に於ける演説)

大内青巖居士演説筆記

諸君、今日は和融會の春期大演説と申すことでありますが、和融會は御承知の如く曹洞宗の若い人達が集つて結んで居る會でござりますから言はゞ今日は曹洞宗の専門演説と申す場合であるが、私は別に曹洞宗といふ限りもない、豫て私は佛法中何處といふこと無くウロツいて居る人間でござりますが、此曹洞宗と申す宗旨は私の

今名乗て居る大内といふ家には、祖先以來誠に因縁の深い宗旨で、諸宗の中に於てもマア殊に親昵の多い宗旨でござります所から、つい斯ういふ會へも牽き出されるといふ様な勘定である

そこで茲に菩薩法といふ演題を掲げて置きましたか、菩薩法といふ名稱は餘り聽き馴れむ名稱で自分も平生斯ういふ名稱を掲げたるも無し、また皆様も殊更に菩薩法といふ題は、お聴き付けにもならないでありませうが、一體一口に佛教と申しますけれども、其内には御承知の如く、大乘と小乗の差別がありますので、其小乗の方は全く聲聞法でござりまする、コレは至て低い方の教で、自分だけの悟を開いて苦惱を除けて、安樂の境界に成つたならモウそれで宜ろしい、自分さへ修行が出来たら他人はどうでも構はんと定て往くのが聲聞所謂小乗といふ名の付くので、ソレは佛の御言葉にも外道二乗と、一口にハヤ外道と同様に言はれてある、疥癩野干と申して、設ひ狐の様な了簡を出すとも癩病ヤミには成るとも、決して二乗の心は出すなどいふ程に佛様から叱られますのが小乗です、何故さう叱られるかといへば、

唯自分さへ好ければ宜い、他人に構ふことは無いといふ考へで、自調獨善と申して自ら調へ獨り善くすることはかりに力を用ゐ、少しも他人を顧みないから、俗にも聲聞根性といふて賤める通り、其んな心を持つてはならぬぞとお叱りになつたのであります然るに今菩薩法と云ひまするのは、コレは一口に大乘と申しますので、其大乘と申しまするとに就きましても、イロ／＼意味合のあるとで、一體に佛法といふものは、我々お互が直に佛に成るといふ手段を説いたものでありますか、元來佛といふものは、自利々他共に圓滿したもので、自分も都合の宜いやう、何も彼も一切圓滿具足するのが全くの佛様、其佛の字を解釋しますると、自覺他覺行圓滿と、自分も悟り他人にも悟らせ俱に涅槃に入るのであると斯うマアいふ譯で、其處に到る手段として、大乘の修行をするのでありますか、其れに付いて殊更に今菩薩法といふ名稱を附けましたのは、聲聞の修行の如く自分だけ好ければ宜いといふ、自利主義のものでは固より無い、さればといふて先づ自分を濟度して仕舞つて、其れから初めて衆生を濟度するといふ様なものでもない、乃ち自未得度先度他の心を以て

修行して往く者を菩薩法といふので、自未得度先度佗の修行は前の聲聞と反對で、自分はどうならうとも少しも構はぬ、自分の身は放抛ほうたつて置いて先づ何より先きに、衆生の濟度きやくどに取掛とりかからうといふのが、所謂菩薩の行願ぎやうくわんであります、其ことに付て今日は聊かの話し致したいと思ふて、私が茲こゝに菩薩法と云ふ演題えんだいを掲かげたのであります

此のお話をするには、モウ少し前の方から段々に話して往かなければならんに依つて話が少し前の方へ戻りますが、佛法に小乗と大乘の區別あることは前申した通り、其小乗の方のことは今暫らく論せず、先づ大乘の方から論すると大乘の内に出家法と在家法との二種類がある、其出家法と申しますのは、御承知の如く僧侶の方に屬する事で、普通世間で法師ほうしんと言はれる身分に成るには、中々一通りや二通りのことでは成れない、釋尊しやくそんが出家學道をなされた通りに、先祖以來の國も家も捨て、妻子の有るものは妻も子も捨て、仕舞しまひ、ドノ様な富貴の身分も顧みず家に在る財産も何も彼も心残さず皆な捨て、仕舞しまふので有りますから、早い話しはなしが乞食になつて

仕舞しまふので、其れが出家の本分と申すもの、日々の食へる物も貯たくはへては置かぬ、毎日其邊そとらを托鉢たくはつして志こころある人の供養を受け、錢も米も少しも貯へては置かぬ、斯ういふ工合ぐあひで修行して往きまするのが出家の定規きまりである、其出家の中にも亦た大乘と小乗の差別がありますけれども、今は大乘の上の出家の話である、小乗の方から見ても矢張り、出家法と在家法とはありますけれども、其在家の優婆塞うはさく優婆夷うはいといふ者は、コレはたゞ其出家の比丘比丘尼を供養することに止まるもので、自分自から其法を修行することは出来ぬ、在家の身分に居つてトテも羅漢らかんの修行は出来ないのであるが、大乘の方から見ると左様では無い、出家して修行することも出来れば、在家の儘ままでも出来る、我々在家の儘で大乘の佛法其儘に、行ふて往くことが出来るのであります、其所そこが大乘と小乗の違ちがふ所、サテ其大乘の方でも出家法になると、家を捨て妻子を捨て非常に難義なんぎを仕して、修行を作せなければならのであるけれども、在家法になると家もあり、家來眷屬けらいけんぞくも皆チヤンと備つて居て、役人ならば公務こうむを執り、百姓ならば田畠たはたを耕たかし、商人ならば商賣しょうばいを營いむといふ様は皆それの仕事を

する其儘で、直に大乘の佛法を行ふて往くのである、斯れが即ち大乘在家の法であります、ソコで此曹洞宗といふ宗旨は、佛法に大乘と小乗と二通りある中では、マア大乘といふ方である、何故にマアななどといふ様な、曖昧な言葉を使ふかといふに、一體曹洞宗の宗祖、承陽大師の御見識の上からは、大乘だの小乗だのといふやうな、名稱の内には入れられないので、直に佛法の總躰を究盡して居る、佛法の總府であると云ふので有るけれども、今一般普通の考の上から見ますれば、矢張り大乘といふ方へ、片付けて往かんければならぬから、マア大乘の方であると、私は申した譯であります、サテ其大乘の宗旨といふても種々あるが、其内で華天禪密の上立の宗旨は無い、華といふは華嚴宗のこと、天は天台宗を云ひ、禪は禪宗即ち此曹洞宗臨濟宗等のこと、密と申すは眞言宗のこと、コレを四箇の大乘と申して、色々の宗旨のある中で最も上乘なのは、此華天禪密即ち、華嚴宗、天台宗、禪宗、眞言宗是れが一番高尚な宗旨と昔から定つて居る、然るに其後になつて淨土宗、眞宗日蓮等が追々開けて來た、コレも前の華嚴天台とは同じ程度で、矢張り一乘圓頓の宗旨

であるから、今では四箇の大乘ではなくて、七箇も八箇もあると申しても宜しい、然し其等の主義のことを、一々此處に述べて居ると長くなるから、今は其中で天台眞言、禪宗といふ位な所を掛合せて、其等の宗旨の大體に就き、出家法と在家法とのことをお話しいたしませう

出家法に於ても在家法に於ても、其宗旨に依て説く所が違ふ、其安心を得る上に於て、出家として修行する仕法も、在家として修行する事柄も、皆それ違つて居る、天台宗三觀十乘といふて、觀念の上に三通の差別がある、それから其修行をする上には、十通りの仕法がある、此三觀十乘といふことは、中々ドウして六ヶ敷い事柄であつて、在家の身分などでトテもこれが行へるものではない、毎日農業をするなり、商賣をするなり、ソレも自分への職業を仕ながらに三觀十乘といふやうな、六ヶ敷い修行を遣つて往くことは、到底出来ることではない、設い出家を仕た人でも、普通の機根の者では、容易にやり遂げることは出来ぬ、一生の間懸命に爲つて、其修行に掛り通しても、一生に初住に入ると申して、五十二位の中の

初住といふ位に入れればソレで善い、中々それも六ヶ敷いといふてある程のこと、其やうな六ヶ敷い事を、出家の身でもへ、一生涯掛つても出来ぬといふ程の修行がドウして在家の者に出来やう筈が無い、若しそれが出来ぬといふならば、在家の者はドウするのであらう、天台宗の安心はドウしたら得られるのであらう、一方から云ふて見ると、佛法といふものは、在家出家を問はず我々御互が、誰れ彼れの別なく佛に成らうといふ話、其佛に成る手段に就て、或は出家を仕て専門に修行を作し或は在家の儘で修行を仕て往く譯であるが、其出家をするには、天台宗なれば比叡山に十二年以上留學して、菩薩の圓頓戒を受けて、菩薩の大比丘といふ立派な和尚様に成り、一生の間少しも懈怠なく寝ても起ても、一心に三觀十乘の修行を積んでソレでヤツと初住の位に入る、ソレも機根の薄い者には六ヶ敷いといふくらゐ、ソレで見れば在家の老爺さんや老婆さん達が、ドウしたつて佛には成れん筈、専門に修行をする、出家が遣つても出来ないものが、ドウして鋤鋤執たり、算盤弾いたりして、働ひて居る者に出来やう筈がない、ソレな六ヶ敷い事を爲んでも外にツモ

ト、手易くいける宗門が開けて居る、老爺さん老婆さん誰でもいける、安賣の店が出来て居る、ソレは何であるがといへば淨土宗である、コレは本願念佛他力易行といふて、何んにも六ヶ敷いことは入らぬ、唯一心専念に阿彌陀様の名稱を、唱へさへすればソレで宜い、南無阿彌陀佛と一遍でも十遍でも唱へさへすれば極樂往生が出来るといふから、コンな結構な樂な宗旨はあるまい、其れもモ一歩ずつで、眞宗へ往くとモット手易ひ、眞宗の方では、御念佛を申さんでも宜いので唯々彌陀の本願にお任せ申して、疑ひが晴れさへすれば其れで宜しい、ソレで屹度往生が出来る、其上の稱名は御恩報謝の營みであるから、心任せに申せば宜いといふのであるから、何の世話も入らずに、此身此儘にモハヤ凡夫では無く、阿彌陀如來の子分と定つて仕舞ふのである、ソウいふ結構な樂な御宗旨があるなら、モウ天台宗の様な、六ヶ敷い宗旨は改宗して、コレからは淨土宗に成つて御念佛を申さう、眞宗に入つて阿彌陀様の御願ひ申さうと皆其方へ往つて仕舞ひ、天台宗の信者は一人も無くなる譯でありませう、何も天台宗の様な散々苦しい修行を仕た上に、ソレでも

マダなか／＼佛に成れないといふ、そんな馬鹿／＼しいことをせんでも、浄土宗の信者に成つて、南無阿彌陀佛を稱へさへすれば極樂往生が出来る、南無阿彌陀佛と唱へる位のことば、造作もないことで時處も所縁も擇ばない、時處がドウでも所縁がどうでも構はない、時はトキ處といふはトコロで、それを擇ばないといふから、何時どんな處で唱へても一向差支ない、雪隠の内でもビリ／＼やりながら、南無阿彌陀佛と唱へても構はない、其れが直に成佛の正因となる、何時でも南無阿彌陀佛、穢ひ所で念佛を唱へたからと云ふて何も罰は當らぬ、サア斯ういふ都合の善い宗旨が一方にあるからには、面倒な天台宗には在家の人達が誰も往けんから、イクラ高尚の宗旨だといふても、信者が一人も無ければ、店を仕舞はなければならんはずてはあるが、左様では無いのである、ヤハリ在家の人でも天台宗の安心を得られるのである、天台宗には亦た天台宗の念佛の仕方があつて、在家の者に教へる時は、即念佛といふことを説く、心に即する念佛、これは自分の心に佛を念すれば、口に唱へるには及ばんといふはどの、念佛であります、普通の浄土門で云ひますれば、

只管口に南無阿彌陀佛を唱て居れば、死んで極樂往生が出来る、極樂往生した上で活きた如來様の御傍で親しく御説法を承はり、其れから自分が佛に成らうと、斯うマア言ふので大層都合は善い様であるが随分迂遠の話、天台宗の念佛の法で云ひますれば、其様な厄介のことは入らぬ、我々御互の此心、憎い可愛い惜い欲いと想ふ此心に、一たび南無阿彌陀佛と、真底から念すれば、其念する所が直ぐ佛である、其れが即念佛といふことで、コレが天台宗の在家安心の仕方である、サウすると浄土門の様に聲を出して、南無阿彌陀佛と唱へるよりも、黙つて念じても宜いのであるから、此方が余程樂であらう、天台宗の念佛の仕方は斯ういう工合である、然るに同じ天台でも惠心僧都といふ方は、稱名念佛といふとを重に教へさつしやつたケレどもそれではまだ不安心であると思はれたのでも有るか西教寺の眞盛上人は、戒稱二門と稱して、持戒と稱名とを並べて勧められた、イクラ心に佛を念じて見ても、戒法が持てん様なことでは、トテモ佛に成れぬから、何は差措ても先づ戒法を持たなければならぬ、又イクラ戒ばかり持つても佛力を仰がんで往生は出来んと

云ふので、コレを戒稱二門といふのが、天台宗眞盛派の教へ方、斯ういう様に同じ天台宗の中でも、教派が分れて居るけれども、兎に角其大體の上から言へば、在家の人に教へるには、皆念佛の一法に依つて佛に成れると教へ、また出家と成つて修行する上には、三觀十乘の道を履んで往くので、其れは皆其人々の機根に依て異なることであるから、或は三觀十乘の道に依るとも、或は念佛の法に依るとも、ドチラから往ても其往く先きは、遂に佛に成るといふことには違ひ無い、天台宗で説く所の出家法と在家法とは、先づ大畧コソナことで、何法からでも佛に成れる、其佛に成る手段に付いて、只今申しだ通り在家の修行の仕法と出家の修行の仕法と、二道あることは、これで解つたでありませう

然らば今度は、眞言宗といふ宗旨はドウであるかといへば、是れはまた中々八ヶ間敷い宗旨であつて、六大四曼三密といふ八ヶ間敷いことが有て、ソレには教相たの事相だのと申して、色々六ヶ敷い修行の仕法があるから、眞言宗の出家法の上からいふと、中々容易なことでは無い、教相と云へば理屈の上からは、如實知身心の

詮議をして、之を實地の上に行ふに付いては、即事而眞當相即道といふて、コレは皆事柄の上に、高尚な道理を表はすのであるから、印像を結ぶとか祈禱をするとかいふ様なことは皆事相の方である、サテ其譯はドウであるかと、書物の上に就いて研究して見れば即ち教相で、其中にも高野山などの方は古い方の道理で、之を古義眞言と云ひ、又は覺鑿上人が出て、加持門といふことを開かれたのが、即ち新義と名付けられる、其等のことの學問上の理屈になると、ドウも余程六ヶ敷い事柄で、尋常容易に解るものではない、鳥渡申して見れば、數珠を一つ拵ぐる上にも、それ／＼皆それ／＼の規則が有つて、其法に従はなければ、越法罪になるといふので有るから、トテモ在家の人などの及びも無いことである、又法師に成つた所で灌頂を受けぬ間は、何一つ傳授を受けるとも出來ず、サテ又其傳授を受けべき事が、色々流義に分れて居て、昔しは野澤七十二流と申したが、今日では何百何十流といふはどあるで有らう、其流儀の違ふに従つて、それ／＼皆違つた理屈が附いて居るといふ有様で、中々六ヶ敷い組織に成つて居る、出家の身でさへ容易のことでは修行

が出来んのに、况んや毎日算盤を彈ひて商賣を營み、鍛鎌を擔いで田畠を耕して居る者に、斯ういふことを仕て見るといふても、それは無理な話で、イクラ百姓町人が工夫して見た所で、出来る筈が無い、立派な御出家方が一生の間、辛苦艱難して修行の功を積み、其上でヤツト悟られると云ふ譯であるけれども、ヒヨツトしたら其れでも、悟れないかも知れぬといふ位のことであるから、在家の人はトテも及びも無いこと、其れを考へたならば、眞言宗の檀家に成つて居る者はあるまい、眞言秘密の六ヶ敷い教に依て、修行した所が、其れで必ず佛に成れると定つた譯でもないのだから、ソナナ宗旨に歸依て居るよりも一方にモツト手軽く佛に成れるといふ宗門がある、念佛修行の淨土門なり他力本願の眞宗なり、孰れへなりと 自分の好む宗旨に入つて、仕舞ひさうなものであるが、實際を見ると左様でも無く、眞言宗の信者が澤山ある、其れならば眞言宗の信者は、皆な佛に成れぬといふことを、承知して居るのであるか、トテモ吾々は佛に成れる見込は無いと、諦めて居るのかと云へば、決して左様では然い、眞言宗には眞言宗で在家の人の簡易な悟り方がある

其れは何んであるかと云へば、矢張り念佛である、其念する阿彌陀如來は、紅玻璃の彌陀と申すやうなことも有て、外の宗旨で念する阿彌陀如來とは、復た一寸其毛色が違つて居り、従つて念佛の申し様も唱へ様も、違つて居るやうなことも有るけれども、ツマリ在家の化導には矢張り、南無阿彌陀佛で宜しいのである、眞言新義の派祖興教大師といふ御方は、紀州根來山の御開山であるが、此御方が御自身の母公を教へさつしやつた時には、例の教相の六ヶ敷い十住心論を研究なされとも云はれず、阿字觀を御修行なされとも申されない、六大四曼の御講釋は少しもなさらんで、唯念佛を申されよと仰しやつたが、其ことは孝養集と云ふ書物が三卷あつて、其中に詳しく書て置かせられた、眞言宗の出家法在家法の差別も、先づザツトこんなものであります、

サテ此の天台宗も眞言宗も、同じく大乘の宗旨であるが、其出家の修行として行ふて往く事は、孰れも甚だ困難な事で、中々尋常容易の業では無いが、在家法の上になると、孰れも南無阿彌陀佛より外に教へることは無いので、在家の人は皆それに

依て、安心を得ることが出来るのである、殊に天台宗で云へば、荆溪大師の御言葉に、諸經所讚多在彌陀とある、諸經は諸々の經、經といふのは佛様の説かせられた御經文、其經文に所讚と云ふは讚するところ、何れの御經文にも讚めてある所は、多在彌陀、多く彌陀に在る、其彌陀法が先づ在家の人の、佛に成るべき道を、手近く教へられたるものである

(未完)

各宗 新撰 說教演說材料集 第三卷終

每月壹回發行代價壹部八錢六部四十四錢拾二部八十八錢郵稅每壹部五厘但前金の事爲替は駒込局にて本社會計宛の事

旃檀

第貳卷第四號目次四月十五日發行

●三十棒 △佛敎家としての社會問題(壹、貳) 藤田精一 △佛敎文學論(其一) ○忽滑谷快天 △水野靈牛 ●論說 △諸法無我に就て ○村上專精 ●史傳 △福嚴曲靈實在論(承前) ○和田壽靜 △吾人最上の快樂(下) ○水野靈牛 ●小説 △この人形 ○歌次 ●彙報 △各宗高僧譚... 弔文... 寄送新刊... 飛花啼鳥... 數件

發行所 發版廣告

博愛

●本誌は佛敎主義の博愛雜誌なり ●故に記事は高尚を失せず... ●本誌第四拾貳號は明治三十年四月二日發行 ●本誌の主論は「佛敎と貨幣問題」佛敎徒諸君に哀訴し印度饑饉の救助義捐を乞ふ... ●其の他論說、演說、法話、文苑、小説、漫錄、雜報、廣告、社告の各欄あり ●編輯主務は米國法學士伊藤義信... ●主幹は三輪謙光 ●監督は現衆議員加々美嘉兵衛等なり ●本誌の見本を要せる諸彦へは郵券五厘切手六枚に代へ發送す

發行所 山梨縣東八代郡下曾根村 峽中博愛社

稟告

『わがゆくみち』は世間出世間に關してわがゆくみちの進路を示す者な
進徳の美行を奨むることを期す

『わがゆくみち』は時々御法主親下の御直諭を掲載し遠近の道俗をして居なから御親
教に預からしむ

『わがゆくみち』は高僧碩徳の説教、法話、演説、講義又宗教學術に關して大家の卓
論高説を掲載す

『わがゆくみち』は毎月一回發行す

『わがゆくみち』は一部代價四錢(全國無遞送料)○半々年分金貳拾四錢一ヶ年金四拾
八錢○但し郵券代用一割増

『わがゆくみち』は前金に非ざれば發送せず前金切れたる節は發送を見合す

『わがゆくみち』の見本の望まるゝ御方は郵券四錢を要す

『わがゆくみち』の代金御送附の節は郵便爲替は廣島郵便局へ振込み宛名は廣島縣沼
田郡三篠村進徳教校内わがゆくみち雜誌社のこと

『わがゆくみち』は廣告料は五號活字一行(二十二字詰)金三錢前金收受せざれば決し
て掲載せず但し回数發行數によりて割引すべし

發行所 廣島縣沼田郡三篠村進徳教校内 わがゆくみち雜誌社

四明餘霞第百拾貳號

明治三十年四月廿四日發行
一冊 金 五 錢
全國 遞 送 無 料

- 四明餘霞 有縁の慈悲
- 宗 要 遮那業學則(承前)
- 論 說 國民教育
- 特別寄書 森林と國家
- 法 話 舍利弗の信心
- 雜 記 米人パロレス氏の來山に就て感を記す
- 時事評論 摩訶止觀圓頓章和解
- 詞 藻 社會の閉場○臺灣の寺院○國家的と世界的○迷信の療治○認可僧堂
- 投 書 訪清潭上人於蒼楠林房(釋愚庵)○愚庵師見訪有詩の次其韻(釋清潭)○
訪愚庵禪師(龍山)○答龍山上人見訪次韻(愚庵)○開壽筵於秋風書室(石
蓬子)○豪徳寺十勝(淺田殿橋)○同手十勝次韻(默嘯)○月瀬看梅(吟雨)
- 公 報 其他律絶十首○和歌日熊其他八首
- 發 行 佛教育女學校設立の必要
- 報 報 佛教育家須乙禁酒すへし
- 行 所 補任辭令○大學林支校試驗報告○文書課報告○其他廣告

天台宗務廳文書課

近江國比叡山

山邊快庵
吉森梅子
明峯生

北友雜誌

第十四號目次

毎月一回八日發行 一部定價金七錢 一ヶ年前金七十錢

社説

●妙満寺派を慰む ●不學者殆矣 ●學ふに如かず

大僧正 文學士

小林日董著 安田崇琢演説

法説

●釋尊の降誕會に就いて

花岡喜之助速記 土田行學筆記

詞藻

●詩 西村醉處、金井之恭、野田秋岳、杉浦梅潭、南摩羽峯、岡鹿門、矢土錦山、依田學海、菊池九江、三角晶、中野文靚、原田忍岳、松田雪隱、菅原濤、三好天山等

●歌

渥美友成、大貫眞浦、松本正泰、伊藤高秋、佐藤爲法、僧日信、平松理英、菅谷義方、大谷巖夫、菅原精

漫録

●皇太后宮陛下佛法御歸依の事蹟(下) ●佛の垂誠 ○健陀國王の破邪入正 ○愚

庭訓

●父兄訓(四) ●聖慮深遠 ●皇后陛下の御孝心 ●皇后陛下の御孝徳 ●祖山御布教 ●三週忌法

雜報

●要 ●足達泰隆師 ●大門了玄師 ●鈴木行泰師 ●妙満寺派の上告 ●萬國東洋學會 ●管長交代 ●紀念大佛 ●東京有志者と海外宣教會 ●戸籍に關する登錄稅廢止 ●北海道未開地貸付の期限 ●北海道鐵道工事 ●千島海底電線工事 ●本年貸下 ●原野の區劃未濟地 ●昨年中の土地處分 ●北海道製麻會社の現況 ●北友會新加

發行所

北友雜誌社

北海道函館區相生町常住寺内

北友雜誌社

三寶叢誌

第四百五十七號 四月廿三日發行

第四百五十七號目次

論説

●再び萬歳の祝詞を論ず

萬非道人 愛佛生

●文明の特色

ドクトル

●明教院僧鎔帥の獲得名號章略註

禿了教

●十七憲法略話(十四回)

●佛生會講式表白文(明惠上人作)

●詩 ●歌 ●誹句

●富の小川

大内青巒

●他力成佛と佛性との關係に就て

巴陵宣教

●出獄人保護の演説 ●紐育の禁烟會 ●四箇格言事件控訴棄却 ●服禮復古の議 ●女子

●一冊定價金拾錢(全國何處迄も無遞送料)

●一ヶ年(十二冊分)前金は壹圓とす

●廣告料一行(五號活字廿二字詰)金拾錢但廣告は都合に依り掲載を拒絕する事あり

●郵便爲替拂渡局は芝口支局と御記入の事

發行所

知會

東京市京橋區築地三丁目六十四番地

救世之光

第七十三號
四月十八日發行

目次

聖晃

●明鏡臺 本尊論(一)
●燈外燈 教界時言と統一團報、新しき宗教雜誌

●籬外月 富の小川
大和撫子
阿鼻心經(三)

旅寐 いろはの意解、さくら花

●泥中蓮 霜夜
智慧俱樂部
病中漫言(二)

●流星電 出講日割
●泥中蓮 病中漫言(二)

●本誌定價 新刊雜書

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

●拾錢〇爲一割増廣告料五號活字廿四字詰一行一回に付八錢半頁壹圓五拾錢壹頁貳圓五

發行所 東京麹町區三番地三十八番地

救世之光發行所

聖晃 大根 内雪 青 根 笹 雪 大 根 内 雪 青 聖 晃

傳燈

第四百四十號

四月二十八日發行

傳燈第四拾號目次

社説 佛耶兩教の現勢及び將來
 同本柳之助氏の佛敎作振案を讀む
 高師大御傳記 論評して布教練習所に望む所あり
 第五師團の軍隊布教 右田橋閣 藤阪竹舟 大西語賦 宮本錦道 和田大圓
 金峯寺に詣るの記 右田橋閣 藤阪竹舟 大西語賦 宮本錦道 和田大圓
 取て眞意の常局者 右田橋閣 藤阪竹舟 大西語賦 宮本錦道 和田大圓
 蓮井松室 藤生義純 藤生義隆 右田橋閣 藤阪竹舟 大西語賦 宮本錦道 和田大圓
 文書 藤生義純 藤生義隆 右田橋閣 藤阪竹舟 大西語賦 宮本錦道 和田大圓
 時評 藤生義純 藤生義隆 右田橋閣 藤阪竹舟 大西語賦 宮本錦道 和田大圓
 雜報 藤生義純 藤生義隆 右田橋閣 藤阪竹舟 大西語賦 宮本錦道 和田大圓
 近事断片 藤生義純 藤生義隆 右田橋閣 藤阪竹舟 大西語賦 宮本錦道 和田大圓
 英照皇太后御百日祭 同靈殿の御代拜 泉涌寺御法要 仁和寺保存に付て
 各宗寺院保存會中央本部 佛國巴里に於ける東洋學會の開設 檀信徒取扱法
 付て 同盟會高等中學林に付き 臺灣布教報道 再度の伺書 大谷派の
 敎成行 四個格言事件 放免囚徒と再犯 サンスクリットの經文 米國基
 實の傳道事業 軍隊布教補助敎師の出發
 地方信託の贈近紹介 會告録事 廣告敎件
 傳燈毎月二回 十三日と廿八日前金一冊五錢一月拾錢半年五拾七錢一年壹圓拾錢
 注意 見本御入用の方は郵券五錢御封入被下度候廣告料(五號文字廿三字詰)一行
 發行所 東京市下京區大條町五十五番戸 眞言宗傳燈會

明治三十年三月十八日內務省許可

明治三十年五月十五日印刷

明治三十年五月二十日發行

編輯者 東京淺草區松清町六十四番地 土岐善靜

編輯者 全神田區三崎町二丁目二番地 加藤熊一郎

發行者 全京橋區加賀町十四番地 丹靈源

發行所 全京橋區加賀町十四番地 國母社

印刷者 全芝區田村町一番地 竹尾幸次

明治三十年三月十八日內務省許可

明治三十年五月十五日印刷

明治三十年五月二十日發行

編輯者

東京淺草區松清町六十四番地
土岐善靜

編輯者

全神田區三崎町二丁目二番地
加藤熊一郎

發行者

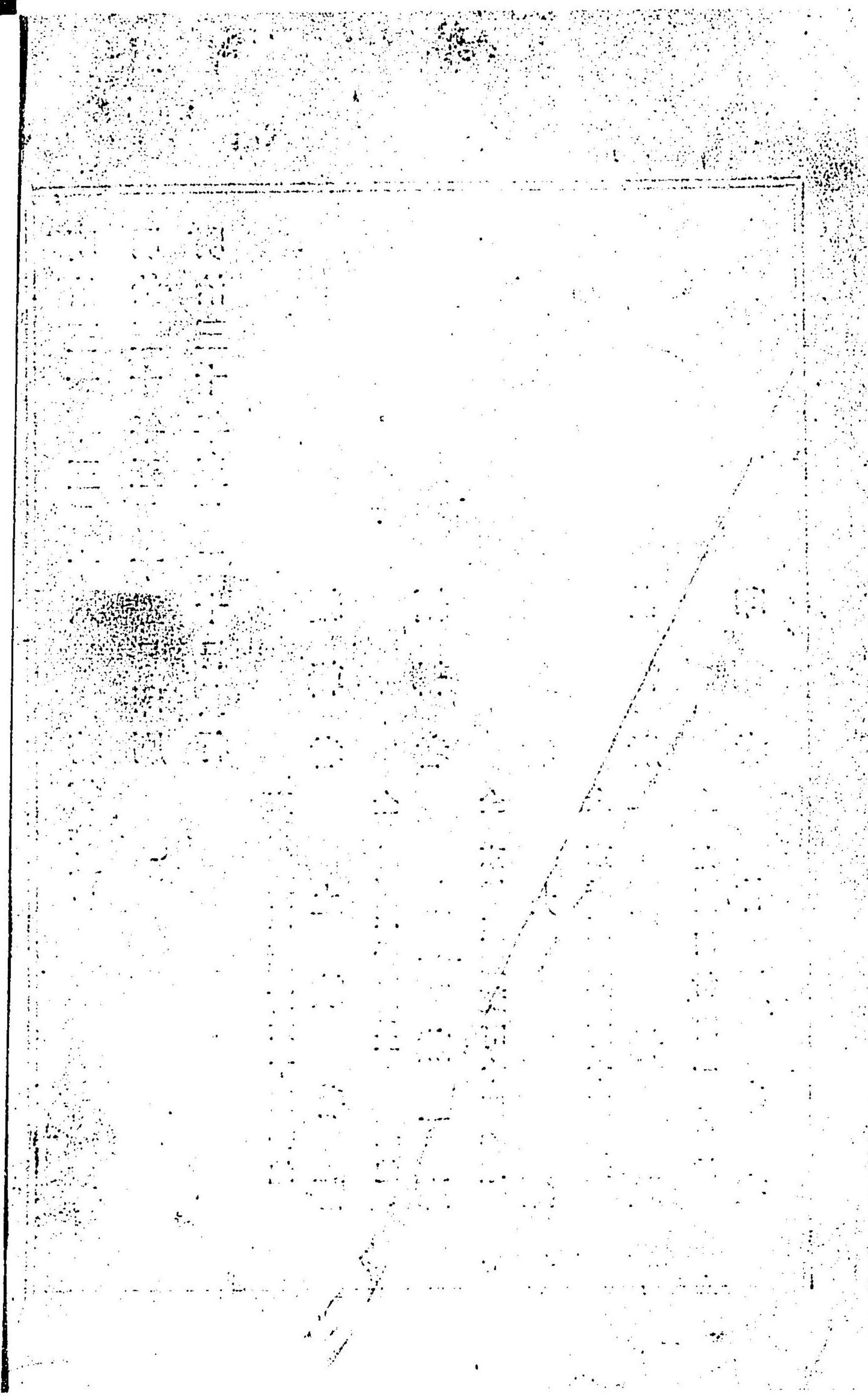
全京橋區加賀町十四番地
丹靈源

發行所

全京橋區加賀町十四番地
國母社

印刷者

全芝區田村町一番地
竹尾幸次



1

2

特 18

928

新撰 各宗 説教演説材料集

3

国立国会図書館

015865-001-0

特 18-928

説教演説材料集 (新撰各宗) 第 3, 4 卷

土岐 善静 / 編
加藤 咄堂 / 編
第 3 卷

M30

ABC-1633

